

日本振袖始

作者 近松門左衛門

和妙—和かなる
布帛
荒妙—織方の粗
い布帛
千早振云々—廣
戈は刃の幅の廣
き矛、其意は神
の振袖にて民を
憐み廣矛にて荒
ぶる神を平ぐる
と也
十握劍—長さ十
握ある劍
神璽—八尺瓊勾
玉

序詞 天照皇太神に奉らる、四月九月の神御衣は、和妙の御衣廣さ一尺五寸、荒妙の御衣廣さ一尺六寸、長各四丈、御髻糸、頸玉、手玉、足玉の緒の緒返し、神代の遺風末の世に、恵をおほふ秋津民、千早振袖廣戈の、國平けく御す、天照太神の御孫、天津彦火瓊々杵尊と申こそ、代々に王たる始なれ。各方の日の神の、御影移りし八咫の鏡、天照是を見る事、吾を見るが如くせよ」との神勅にて、民恤みの仁の道、百王の後迄も内侍所と崇めらる。扱又御先祖伊弉諾尊より、御相傳の十握の寶劍、これ勇の形、義の理、御伯父素戔鳴尊、猛く勇める御器量とて、此寶劍を預り、王を後見ましますば、神璽の不測の禮智有。三種の寶の神徳に、家に樂み野に耕し、手打て謠ふ土民迄、式を越さる玉垣の、内つ御國ぞ道廣き。卅二臣の棟梁、藤原の大祖、天津兒屋の臣、御前に正笏し、

打赤め—原本打
あがめ
二柱—伊勢諸伊
妹冊の二尊
豊の明—饗宴
露のかごとけ—
ほのかにといふ
位の意

ナねくしく—
ひがみたる心にて

「王既に寶祚の御位、天下萬民の父母たる御身、夫婦妹脊の道欠ては、王道いかで行れん。御心に入、御目に付たる女あらば、夜るの御座に召入れられ、然るべし」と奏問あれば、恥かしげに御顔を打赤め、環「二柱の御神始給ひし夫婦の道、色を好むは僻事ながら、去年の冬、豊の明の燎の影、垣間見し面影の身に立そひて忘れず、露のかごとに名を聞けば、大山祇の臣が娘とや。深山の立木野邊の草、靡かぬ方はなけれ共、引にひかれぬ戀草の、種を誰かは植初し」と高き賤しき戀の曲、浮世恨の御詞。兒屋の臣を始、伺候の群臣一同に、「こは勿躰なき御かこち。何事か御心に叶はぬ事や候べき。折しも大山祇、御前に有こそ。幸、御分の息女御宮仕に參らせ、敷慮を慰め申されよ。はやくお受」とありければ、大山祇謹んで、「臣、娘二人持候へども、姊岩長姫は容醜く不束にて、心迄すねく敷、親の眼にさへ疎ましき生れ付、宮仕は思ひも寄らず、妹木花開耶姫、容心様、姊とは替り、女の敷にも入べき者。宣旨違背候はじ」と勅答も終らぬに、鰐香背の臣といふ奸曲の佞臣、高遣戸荒らかに引明、大山祇の前にととうと座し、「是山祇、御邊が性根は有か無いか。胸の中を探して見よ。開耶姫には、忝も素戔鳴の尊御心を懸られ、此鰐香背の臣がお使にて、御所望有しは何とく。娘を天子へ

見せんづー見せ
んず

備ひー追拂よ
しはくー腰に
かく

上たぐば上て見よ。又素戔嗚の尊へも上させて見せんづ。ど性根を定めよ」と御前共憚らず、袴の裾けはらかし、禮義を顔して責かくる。大山祇ちつ共臆せず、「いはれぬ他の性根穿撃、先御邊が性根、有か無いか、腸を探して見よ。尤娘御所望のお使は得たれ共、素戔嗚の尊に契約は申さず。其時御邊が辯舌、「御身に深き大願有、御本望達すれば、舅君と仰がるゝ後の果報を思へ」などと勸めしかど、「兎角娘は進ずまじ」と申切たを忘れたか。但、御邊と契約せしか。其時の魂有やいかに」鬪ヲ、契約した程ならば、口でいふて置ふか。よし契約は有共無く共、一旦答へは有筈。天子の伯父君、後見たる素戔嗚尊を侮るか。此鰐香背の臣を侮るか、侮る太刀の刃鐵を見るか」と、既に柄に手をかくれば、兒屋根の臣聲をかけ、「ヤアく、恐れを知らぬ鰐香背。理非は兎もあれ、宮中に太刀に手を懸け無禮の振舞、上を輕しめ奉る其咎據なし。刃を以人の肌斷、傷殺さば、國つ罪科にしづめよと、天照神の御制法。中臣の家に奉て、此兒屋の臣が急度罪に行ん。誰か有、彼れ讎出せ」と、棟梁の臣の凛々たる、威勢の聲に吃驚して、さすがの鰐香背大口すほめ、蛭にしほく退出す。面目なふぞ見えにける。斯る處に美濃の國の造、早馬に汗かよせ、蹄を飛せ、庭上に大息つぎ、「扱も本國殞山の巖窟に、三熊

鬼神に云々、
にて鬼神は善惡
の應報を誤る事
なしとの義

蠅聲―田植頃の
蠅の如く群がる
疫神

鳩槃荼―厭魅鬼
なり鳩槃荼食
人精血其疾如
風(圓覺經)

監禁神―八部鬼
衆の一
窺ふなんめり―
原本うかふなん
めり

身ぞ―下に寄き
の二字を略せり

野大人と申惡鬼隠れ住、百千の眷屬村里にあふれ、青山を枯山にし、人民に毒氣を吹かけ、惱し苦しめ、人の命を取る事、毎日千頭余り。早く討手を下されずば、人種は候まじ」と奏すれば、上下の男女、驚き恐るゝ計なり。君震襟を惱まされ、「天照御神高天が原にて、諸の惡鬼惡神を誡め給ひ、長く我國に仇を爲さじと誓ひの手形を顯して、鬼神に横道なしと聞。今國民に害をなすこそ不思議なれ」と、神璽の御箱を開き給へば、天津兒屋進寄、繡印の一卷、八座の机にさらくと、線披けてぞ數覽有。異類異形の鬼神の手形、鳥の足蛇の爪、或は人に似たるも有。螢火の光、惡神、蠅聲疫神邪神、鳩槃荼夜叉神藍婆神、此神國に害をなさじと、惡鬼惡魔の手形の中、三熊野大人といふ手形更にあらざれば、いか成變化の所爲ならん」と、疑ひ恐れ給ひけり。天津兒屋につこと笑ひ、「恐るゝに足らず。此手形に洩たるは、必定新羅、百濟の異國の邪神、芦原國を窺ふなんめり。武勇に猛き素戔鳴の尊を以、平け鎮められんに何事か候べき」と、速日の臣を勅使として、素戔鳴の尊に宣旨有。惡鬼退治の大将の印に賜る御簾に、照輝ける月と日も、同じ種成皇の、御代に住身ぞ三重掛巻も、忝も日の神の御弟素戔鳴尊、御身の長八尺、力千人引の岩を轉し、猛く烈しき勢に、邪を碎、仇を打こと、暮秋の嵐木枯の、草

千箭の箠―數多
の矢を入れたる
箠
心葉―冠の上に
著くる銀の袴り
花
小車の錦―小車
は錦の地紋
箠の弓―黃櫨の
材にて作りたる
弓

鞆―馬の頭部上
り髻にかくる組
緒

鞆―鞆に同じ

木を破るに異ならず。悪鬼退治の宣旨に任せ、軍慮をめぐらす小車の錦の著長、銀の心葉、鬘に取付、韓跣の御佩刀、太手纏に白木綿かけて、千箭の箠、樟の弓を弓管高に振立、天斑駒白泡嚙せ、ゆらりと召せば馬の背も、撓む計の御骨柄。侍従の童天稚彦十八歳、主君に劣らぬ不敵者。御馬の左に引添ふて、三千余騎が隊伍を亂さず、日月の御簇真先に、八十縫の白栴突立く、しつとりしとく打たるは、花待雲に雨を帯、暮山を出たる御勢。事も愚や、出雲の國大社、産御神、又は祇園牛頭天王、厄神攘ひの荒神と、末世に顯れ給ひしは、今此尊の御事なり。後陣の方より、「なふく御馬暫く」と聲をかけ、鰐香背の臣一文字に駈來り、鞆取て引留、鬘扱々不覺の御出陣。知召さずや、兒屋の臣威勢に誇り、大山祇を瞞し込、木花開耶姬を天子の女御に供へ、君に鼻明せ、萬民の笑ひ草として、天下の後見、伯父君の威勢を落さん謀。御預りの國の寶、十握の劔も取上られ給はん。遠廐の御留主、開耶姬を内裏へ入れては、君御一生の御恥辱。臍を嚙共かひ有まじ。是非御歸り」と、鞆擱んで二三間引返す。左に立たる天稚彦、轡に絶て、「待てくくく。こりや不吉者、悪鬼退治の軍の門出、一寸でも返すとは、暖氣にも出さぬ忌詞。忌々しい聞たくない。兒屋の臣が權柄に、我君の威を落さんかとは、

初一念―最初の志
水付―手綱着る轡の穴

九一尊の自稱

そりや其時。何ぞ今から海も見へぬ舟用意。悪魔も挫ぐ素菱鳴尊、臆病神に引され、道より逃て歸りし、と末代の嘲り、煮ても焼ても遁るよか。殊に宣旨を背く過り、伯父君とて御免はない。分別過れば愚に返る。初一念に御進み」と、轡の水付ゑいと掴んで、四五間引て引出せば、轡こりやくくく。こりや天稚彦、汝が腹中狭い。此魚香背が大腹中、宣旨を背く御咎め有こそ幸。それを次手に御謀反勸め、瓊々杵尊の御位を追下し、此君を天子と仰ぎ、開耶姫を后妃に立、天津兒屋を流罪に沈め、某棟梁の臣下と成政道を施さば、天下に暗き事有まじ。是非お歸り」と、馬引立引返す。稚いや君を討て、己が名利を貪るか。そうは爲せぬ」と、又引出せば又引戻す、兩方腕骨限りぞと、引つ引ると梓弓、弓杖三杖四つえの間、野邊の若草踏しだき、駒嘶ふ聲ゑいゝ聲、人馬の足音どろくく、引ば返し、返せば引、寄る方分かぬ蟹小舟、汐の落合逆波に、揺れ揉ると如くにて、駒も四足を立かねたり、尊大きに御氣色變り、馬上より天稚彦をはつたと睨み、天も響く御聲にて、「推參成小童、丸が心も伺はず、さかし過たる利口達、瓊々杵尊は帝王なれ共天照神の御孫、我は弟、先祖に近きは此素菱鳴、秋津島に於て肩を並べん者誰か有。心をかけたる女一人望叶へず、何を我身の思ひ出にせん。宣旨を背

いそふれ一息げ
 上
 紅くこれにか
 く
 もみ一紅絹と
 探物一神樂の歌
 にあり賢木幣、
 杖篠弓劍、鈴
 酌葛の九種
 大山祇一逢ふに
 かく

くなんどとは外の事。戀路は縁の物、何の咎め有べき。今夜悪鬼降伏の爲、八咫の鏡の
 祕封を解、御戸を排き、諸人の參詣許さるよ。開耶姬が詣でぬ事よもあらじ。密に内裏
 に忍入、奪取て本懐遂ん。其處を放せ」と、鏡の鳩胸踏反し、靴取たる腕首はたと蹴放
 し、「いそふれ小童」と馬立直し、手綱も戀に紅の、もみに揉ふてぞ三晝暮急ぐ。月も十
 寸の御神鏡。惡魔降伏の御祈禱、今夜始めて御戸排き、篝火輝く瑞籬に、御神樂、探物
 諸物、御魂の鏡世を照す、磐戸開けし始迄、爰に覺えて君と臣、心も合に大山祇の妹姫、
 姿形容は名に顯れて、是ぞ木花開耶姬、「此日の本の寶物、拜むといふも稀の事、心の障
 なひ様に、姉様へは沙汰なしに、いざ」とて局腰本や、中居などをお供にて、畏所に
 參詣有、「忝し」と正直の、其一筋を御一五三繩、神も受させ給ふべし。心靜に姫君、幣
 奉り再拜し、本なふ何れも能ふ拜みや。あの眞中に月日の如く、照輝かせ給ふこそ御
 鏡と申物そうな。右は神璽の御箱、左の箱は十握の御劍、則三種のお寶物、中にも八咫
 のお鏡は、正眞の天照太神様、萬の願も叶ふと聞。いか成御縁か、帝様より自に度々
 の御玉章。我とても恐れながら、貴成君がおいとしう、思ひ沈みし戀の海、天津兒屋の奏聞
 にて、内裏へ召さるよ筈なれ共、姉岩長姫様の法界悋氣が邪魔と成、何のかのとて遅

念比に一念入に
お顔なら云々
お顔といひ姿形
といひ
滅多腹云々無
闇に腹立ての廻
みづ〜若く
て麗はし

形移る一影映る

現一打にかく

なはる。姉様の氣が和けば、みづからが戀も成就する。邪見なお心止む様に、立願頼むとの給へば、早苗の局が「御尤く」。岩長姫様のお根性の悪さと申、私始め見めの悪い女子も多けれど、扱もく念比に見ともなひ。お顔なら、とりなりなら、交なしの本悪女とはあの事。惚て進ぜる男はなし、滅多腹が立てのわんざん。何方の御異見でも聞入の有氣質でない。頼むは神様。サア腰元衆も願懸や」と、力をつくれれば姫君も、猶伏拜みく、顔振上げて、本ヤア是は不思議な。あれく、御神躰の中に、此世に御座らぬ母上様、年月経てもお顔は忘れぬ。お年も寄らず、みづくと若やいで、唇は動け共お聲は聞えぬ。みづからを憐み、神の恵で見へ給ふか。胴慾な姉君に異見してたへ母上。なふ懐しや床しや」と鏡とは名を聞計、世に廣まらぬば見始の、向ふ我影移る共、白木綿かけし神前は、涙憚る哀さよ。御拜も終り瓊々杵の尊、「若彼人や詣でし」と高殿の御簾押遣り、歎覽有。姫はそれ共瑞籬に、打傾きし後姿、御覽も敢ず御心騒ぎ、どんく轟く御胸は、神樂太鼓の現なき、形は八咫の鏡の中、爰にといはぬ計にて、移り向ひし御儀あれ戀しき君よ」と飛立計、抱付んも手は届かず。折られぬ花の開耶姫、有にもあられず、是申及ぬ雲の上人様、恨と申も恐れながら、姉に妬まれ、責られ、憂き

舌たるいーしつ
こい

穂に現るー顔に
出る

左前ー鏡に映れ
ば右前も左に見
ゆれば云ふ
抜かるー欺かる
月夜に云々一月
夜に釜抜くとて
迂濶にして出し
抜かるる語、二
度は蓋にかく
物見だけ云々一
物見高いが色の
道の習
岩長ーいはぬに
かく

目、辛き目、神を祈り歎くをも、憐のお心なく、なま中にお姿計、お詞もかけられぬ
は、舌たるいがお嫌ひか。淡泊がお好なら。どう成と御意次第。いとし可愛のお文は、
誠か本か、覺えてかいの」と宣へば、君もあこがれほくくと、類給ふ鏡の影、聞ム
、其御心底なれば、忝ふて猶戀しい。延々なは此方やいやく。今宵は館へ歸らず、夜
るの寢殿に只一夜、枕も入らぬお褥の、端に宿借たい」とさよめければ、君もせかるよ御心、
穂に顯れて聲立ぬ、繪にかく柳糸櫻、類き合つ招き合ふ、戀は昔もなまめかし。早苗の
局もどかしく、「ア、辛氣、口で計濟む事か。お側へ寄て抱付て、仕様模様も有そな事」
と氣をもめば、聞いや待やく。合點がいかぬ。あれが誠の我君ならば、召たる衣の襟
付が右前の筈、左前に見ゆるは、外より移る影じや物「早エ、ほんにだまされた。抜か
れてのけた」と氣も抜て、人々とほんと月夜に釜の、二度恨む後より、「爰にく」と勅
錠の、御聲を知邊に振返る。聞ハア是ぞ我戀我思ひ」と、走寄組付、言の葉もなく品
もなく、互につこりにこく瓊々杵の尊、笑顔と笑顔打重ね、引寄せ抱寄せ締寄せて、
几帳に纏れ入給ふ。局を始腰元はした、こほれかより乗かより、覗き呟き羨むも、女
心の玉簾、物見だけきが色ぞかし。誰がかく共岩長姫、「我に隠れて妹が内裏へ參るは曲

うつほ柱―中空の柱

運切鼻―獅子鼻
春尻―春形の臀
所知入―俚言葉
覽に諸侯の初め
入國するを云へり

桑原―雷鳴に必
ず云ふ、堂上の
桑原家は皆家な
るを以てなり

者」と、衣打被き只一人、御殿を見れば女房達、奥を覗き密語く躰。「扱は妹奴と帝と寐くさつた。エ、妬しい浦山しい。見届て、おのれ引裂てくれう物」と、うつほ柱に身を隠し、聞共知らで女房達「此事構へて姉御へ隠しや。もし耳へ入て、怖い顔に嘖恚燃さば、なふ怖やく。さりととは違ふた御兄弟、妹君は天下の美人、姉御の頬は何に似た。盥口に蓮切鼻、猿眼に鉢額、耳は木耳、顚は蝶螺殼、春尻に鰐足、歩き振は家鴨の所知入、物ごしは破れ鍋。あの様な悪女と夫婦に成男は、よくくの運の盡、それでも枕を並べて傍にがさりと寢たらば、歌毬栗頬髭、いばら鬚、どさ打下しの荒筵、鴈木、鑢、鮫肌、突く様で刺す様で、しつくり、ほつくり、がつくり、しやつくり、寢返打たら寐られまい」と、どつと笑へば岩長姫、「ヤイそりや誰が事じや。ま一度吐せ。顚蹴てく蹴放さう」と、御殿も揺ぐ雷聲、わつと平臥女房達、「世直しく桑原」と、生たる心地はなかりけり。岩うぬ等は隙な任に、人の顔の講釋か。能ふ妹を連れて來て、姉の戀の上荷跳させたなあ。妾が大事の戀君と、ぬくく寐させて置ふか」と、走廻るを早苗の局、抱き留め引据え、「是岩長様、たとへ賤土民でも、身を慎み世を恥るは女のたしなみ。大山祇の臣の姉嬢。爰は何處ぞ大内。人の訥を思召さぬか、淺ましや。人のいふが誠か嘘か。偽のな

酸醬—酸漿にて
赤く輝くをいふ

四大—地水火風

神祇—神靈

い天照太神の御魂に顔の移るを見給へ」と、各取付押立く、八咫の鏡に差向たり。あらおんしや、虚靈不昧の徳に照され、内心如夜刃の相顯れ、鏡に移る悪鬼の面、眼は酸醬牛の角、上下の牙は劔の如く、見る人はつと氣を失ひ、暫し絶へ入計なり。我と我身の鏡の影、始て驚く氣色にて、惘れ果て見へけるが、岩ヤイ局、鏡に移る妾が顔は何と見た「早ア、形計は人なれ共、心の鬼のしるしには、悪鬼に見えし」といふより早く飛かかり、鬢を掴んで膝に引敷き、「エ、口惜や。神明の幣に四大五臟を探され、正躰見られし腹立や。生置て、己等人に語れば我身の仇」と、兩の腕ふいと引揚げ、二つにさつと引裂しは、薄紙裂くが如くなり。「なふ怖や」と腰元下婢、身の毛を立て逃惑ふ。岩ヤア逃るとて逃そふか」と、大手を擴げ追廻す、凄しかりける勢なり。折しも天津兒屋の臣、奉幣に参りかよつて、此有様を見るよりつとと断隔て、見ヤア心黒し岩長姫。妹なれ共開耶姫は后妃の位。恨妬むも恐れ成に、剩宮中といひ、三種の神祇の尊前にて、神も君も憚らず、法を知らぬは畜類同然。汝も大山祇の娘ならずや、恥を見ぬ先罷出よ」と、はつたと睨んで怒り給へば、岩長けらくと嘲ひ、「棟梁の臣なん共ない。討れうが、切られうが、本望遂すば動かぬ」と、睨み返す瞳の光、人間ならぬ鬼畜の相。見「扱こそ

あふ〜追ふ
にかく
あつから〜お
に扇をかけた
り
わりなき一語方
なき

變化ござんなれ。いで物見せん」と、掛巻も畏所に駈上り、神鏡抱き奉り、頭に捧げ、口には天津太諄、悪女が眉間に差向け差當、千早振るゝ和光の稻妻、閃き渡つて岩長姫の、嗔恚の巖も碎る計、五躰を縮め身を顛し、橋慢我慢の勢絶へて、よろゝと足弱車の、廻り歸れば追立られ、追廻しく、又立戻ればおふく、大床さして追下す。斯る騒ぎの有ぞ共、知らでや素菱のおのづから、戀に揉ると御姿「開耶姫を奪取迄」と、人目を包む通路の、門も築地も飛越へて、恐るゝ關は恐れなく、「もしもや我を咎むか」と驚く物は風の音、忍ぶに辛き月影の、さしもに猛き御心も、わりなき思ひにかきくれて、「爰よりや入べき、彼處よりや入べき」と、前後に迷ひ立給ふ。殿上臺盤の方に叫ぶ聲しきりにて、恐ろしや凄しや」と、逃出る上臈を、袖をひかへて、蓋是々如何なる騒動。氣遣さよ」との給へば、扇なふ巾岩長姫は變化にて、誠は鬼の正躰顯れ、早苗の局を引裂、御座の間近く入らんとせしを、兒屋の臣様、御鏡を以追拂ひ、御殿の騒ぎ、なふ怖や」と云捨、散りくゞばらくゞにこそ逃出けれ。蓋ム、ウ扱は彼奴、丸が討手を蒙りし美濃國の悪鬼が化身よな。退治延引の間を窺ひ、十握の寶劔を盜、此日の本に劔の威徳を削らん爲の悪魔の所爲。丸が預る寶劔を盗まれては末代の不覺、芦原國の

豐滿―遍滿か
相殿―劍と鎧と
一つに安置せし
れし御殿

天蠶斬―素戔嗚
尊八岐蛇を斬り
給ひし劍、次の
天羽々斬と同
じ、天羽々斬今
在石上神宮(古
語拾遺)

武勇の破滅、我恥辱」と寶殿に駈上り、御箱の祕封「忍いやつ」と捻切、御劍を御身に
しつかと携へ、素サア神通自在もなさば爲せ。寶劍は渡さじ」と獨語してまします處に、
思ひも寄らぬ簾中より、天稚彦つよと出、「内裏に悪鬼顯れしと承はり、御跡慕ひ駈付、
方々尋申たり。いざ還御」とぞ申ける。素チ、出來したく。一大事は此寶劍、汝供奉
して館に納め、油斷なく守護し奉れ。丸は此紛れに開耶姫を奪取、追付伴ひ歸らん」と
うたてや御劍をやすくと、渡し給へば押戴き、稚君知召さずや。彼悪鬼と中は、天に有
ては雲の八街に住、地に有ては八方八隅に變滿し、八色八面の惡蛇、此寶劍を奪はん爲、
大山祇が娘と生れ、疾くに取は易けれ共、相殿に在す鏡の威光に押れたり。八萬年が其
間、念をかけたる此寶劍。望叶ひし嬉しやな。岩長姫は我なり」と、いふ聲も山彦の、鬼
女と顯れ突立たり。尊いらつて牙を噛み、「エ、口惜し、誑られし。八萬年の望成共、半
時持せ置べきか」と、御怒りに顔色も、あらく凄じや荒神の、天蠶斬拔そばめ、禁裏
雲井の樓閣の、神殿本殿廊下渡殿御階の下、切かけく、ほつ詰られて通力の、電光
石火水の月、前に顯れ後に消へ、震動雷電頻りにて、内裏も虚空に廻るか、兒屋の
臣を始として、雄走の臣、速日の臣、三十二臣四方を堅め、漏さじ物をと詰懸たり。惡

七多羅樹一印度の喬木、一多羅樹高七仞、七尺曰、切(翻譯名義集)

齊機殿一齊み深めたる殿にて神日の御衣を纏る所の晝の御座一清涼殿にありて主上の晝の御座一同夜なる御座一同上主上の御座所雄詰一雄々しく叫ぶ事

與機一死體の眼

鬼が身より火焰を放せば、尊の劔の稻光、恐れて虚空に飛上り、ウタイ其高さ七多羅樹、
 豈例へ天地は覆へる共、取たる劔は返すまじ」と逆手に取て柄頭より、鬼一口に呑む
 ごと見えし。朝拜殿に尊あれば、齋機殿に悪鬼有、いんはた殿に駈入給へば、新嘗殿に
 悪鬼有。新嘗殿を追詰給へば、殿上、日の御座、夜るの御座を行違ひ追廻し、悪鬼の叫
 喚、尊の雄詰、太刀音、足音、ゑいや聲、大地も裂る、三重計なり。悪鬼が飛鳥のかけり
 をなせば、尊は射る矢の早業猛く、爰に追詰兩腕切、彼處のつまりに兩脚薙ぎ、踏伏て
 首討落し、太腹胸骨、五躰を八段に切碎き、臆を寸々に切さばき、見給へ共呑たる寶劔
 あらざれば、勇みに勇む素戔嗚の、矢竹心の力も盡、惘れ果てまします處に、魔風どつと
 梢を鳴し、切離れたる八つの與躰、蠢き出て集寄、一團の火焰と成、寶劔を引包、響
 き渡り鳴渡り、車輪の如く舞上り、霆き閃き飛で行。尊は身を揉み拳を握、つばさなけ
 れば飛行なき、虚空を睨んで立空に、雲を卷込颯風、さらさら、どくどく、
 四大海の荒波の、天に逆巻ごとくにて、其行方は天さがる、蓋國の果島の果、海龍王の
 棲家迄、探し求す置べきか」と、無念の涙はららら、
 「兄弟の月讀、日讀も照
 覽あれ、寶劔を取らずんば、都に歸らじ地は踏まじ」と、誓を堅め踏堅め、踏たる土や

あらかねの、金鐵の徳備つて、強きを破り剛きを割り、硬きを砕く牛頭天王、末世の惡魔疫神を、防ぐ神威ぞ有難き。

第 二

懸河一早瀬の川
山又云々山重
り水重りて奇巖
は削りなしたる
如く嶽の淵は染
出したる如し
(和漢朗詠集)
汐合一潮の満つ
る所

萬古目前の境界、懸河渺々として巖岬々たり。山又山、何れの匠か青巖の形を削りせる。水又水、誰が家にか碧潭の色を染出し。天より降り降し殞山、見上る嶺も森々と、萬木雲を貫ぬけば、月日の影も日に見へぬ、鬼住山ぞ恐ろしき。厄神の首領三熊の大人、眷屬部類の惡鬼邪神に圍繞せられ、黒雲に跨り座し、猛虎の吼る如き大聲にて、語つて曰、「扱も芳原國の始、天照太神に責付られ、我等が類、人民に仇をなさじと手形の誓をなしけるに、我其時は八重の汐合に隠住、彼手形に外れしゆへ、此度當國當山に住居し、風水山嵐、霧霞と變じ、人民に邪氣を吹かけ、惱し煩しめ、氣をのみ、血を綴るに、日本入肥て血の味甘く、眷屬の汝等迄腹を膨す事、唐土天竺に勝る。然るに素戔嗚尊といふゑせ者、討手を蒙り、あれくあれを見よ、籠に數萬の軍兵鉄を揃へ、鉾襖を作つて攻上る。そも素戔嗚なればとて何程の事あらん。通力自在は此度。水を卷上火焰を降

時一鯨波

同じ毛一鎧と同じ糸にて織す
たけ成駒一たけは四尺を定尺とす(貞丈雜記)

そびをかふーそびけ水乞鳥にて雨の降らんとする時鳴いて名を呼ぶと云ふ(狸言集覽)

し、身を隠さば芥子に入、顯れば天に跨り、軍兵蹴殺し踏殺し、力立する天稚彦が細首引拔、手足を挽ぎ、尊を挿て八つに引裂き梢に晒し、日本を魔國にせん。勇めや進め眷屬共、怨々やつ」と喚く聲、雲に篠の木の葉を鳴し、鐘に響く時の聲、石を降せて雨交り、土風山嵐、三重一セイ尊の呢近天稚彦、「拔懸の高名し、目を覺さん」と夕闇に、物の具取て肩にかけ、同じ毛の甲の緒を締め、たけ成駒に鞭くれて、舍人も連ず只一騎、陣所を出て鬼神の住む、繁目を目がけ歩ませたり。春雨の足もしどろに雲深き、嶮岨巖壁九折、ウタイ俄に吹來る風の音に、駒は頻に高嘶し、身振ひしてこそ立たりけれ。稚、ヤア怪しからぬ空の雨風、鬼殿そびを飼るよな。ム、それ好た面白い」と、鎧踏張り、鞍蓋に突立上り大音上、「只今先陣の若者を誰とか思ふ。忝も天地同躰の御神、伊弉諾伊弉册の尊の御子、天照太神の御弟、神武勇力の譽れ有素戔鳴尊の膝本去らず、天稚彦とは我事。手形外れか手形を背くか。三熊の大人虫とやらんに見參せん。出合やつ」と呼はつて、山を睨んで控へしは、いか成天魔疫神も、恐れつべうぞ見えてけり。山はひとつそと靜つて、答ふる物は嵐の音。稚、エ、聞た程もない鬼共。一正も頼出しせぬは天稚彦が怖いか。出よく」と乗廻しく、乗据てひらりと飛下り、「折角寄ても先陣の、證據な

甲の鉢云々此
所渡部綱が茨木
童子に搦まれし
趣向を取る
あらかねの土
の枕詞

忍びの緒一兜に
著けて願の下に
結ぶ緒

推參一無禮

壹段調一音樂の
調子に十二律あ
り其第一を云ふ

くては後日の不覺」と、指添拔て松の荒皮抑削、腰指の石筆嚙濕し、文包「今今日當山
に先陣をかくるといへ共、臆病の鬼共一疋も出合す、近比弱味噲鬼味噲の汁かけ鬼、喰
残す残念く、素菱鳴尊の御内、天稚彦十八歳」と、大文字にぞ書たりける。時に山谷
鳴動し、古木を吹折る一嵐、頭の上に落かより、一丈余りの鬼の腕、朱塗の熊手と云つ
べく、毛は金銀の針ばりく、甲の鉢を、無手と搦んで引上たり。稚「ヤアしほらしし。引
ればせじ」と、兩足しつかと踏しめて、鏝に手をかけ、うんと留ればゑいやと引、ゑい
やくおふくわんと、引つ留つと人力魔力、暫し勝負はあらかねの、土を離れて引上
しは、釣瓶を釣たる如くなり。太刀を逆手に突共切共、手答へなし。「さしつたり」と取
直し、切て放す忍びの緒。主は大地へどうと落、甲は雲間に引入て、虚空にとつと笑ふ
聲、山も崩ると計なり、臆病の癖高慢者、鰐香背大きに腹を立、「天稚に先陣越されし奇
怪」と、軍勢引具し一散に馳來り、「軍大將を出し抜き、制法を破り、拔断せんとは推參」と、
聲をあらよけ罵れば、稚「いやさ手柄は仕勝、味方同士の廣言いふ手間で、鬼に對つ
て一句も出るか。聞たいく」鰐「テ、覺へがなふて大將が成物か」と、壹越調をかすり上
げ、「抑惡鬼追討の勇將、素菱鳴尊の執權、軍大將、鰐香背の臣とは我事なり、名を聞て

鬼だまゝいー風溜

酒落臭くー生意氣

さへ吃驚りせう。顯れ出て怪我しようより、怖くば何奴も出おるな一と、厳しけに呼はれ共、胴はわななく、慄ひけり。諸卒を下知して天稚彦、差詰引詰射かくる矢先、悪鬼も堪へず爰の梢、彼處の雲間、異類異形に身を變じ、土石を飛ばせ火焰を放ち、人畜兩陣入亂れ、火水を散して三重挑み合ふ。寄手は大軍四方八面に切立られ、鬼だまゝにくはつくと、溜息吐てぞ控へたる。其中より犢牛の二疋連、鐵杖提三熊の分身隠れなき、滅鬼積鬼といふ早業、「鰐香背が名乗様、洒落臭く人臭く、鼻がひこく香しし。サア出て勝負せい。汝等が世話に云ごとく、我輩が煎餅嚙む様に、がりくと嚙で呑んず」と、大口明てぞかよりける。詞に似ぬ鰐香背、がたく慄ふて逃んとす。天稚彦草摺取て引戻し、「敵に聲をかけらるゝは弓矢取る身の好む處、軍大將のお働見物せん。所望く、サア一軍」と突出されて、慄ひく抜合せ、二打三打討つと見へしが、滅鬼積鬼がちらつく早業、打立く追つたてられ、鬨エ、血腥い鬼共、穢いく」と頭掉て、味方の陣へ逃入しを、笑はぬ者こそなかりけれ。勝に乗つて追かけ来るを、天稚隔て渡りあひ、上段下段に切結び、飛鳥の翹の手を碎き、弓手馬手へ切散し、喚いてかゝる眷屬共、「得たりや應」と聲をかけ、當る者を幸に、落花微塵に三重切散す。大將三熊、三尖二刀

鼻明せーだしぬき

退散云々一魔軍のは魔軍をの音轉

皺の川上―皺の川上にて以下同

の鉾ほこ輕々と横たへ、づしりくと揺ゆるぎ來る。鰐わに香背かへきつと見るより、「何でも爰しあんは思案所しあんじやう。彼奴きやつを討あめわて天雅あめわかに鼻明はなあかせ、今の面目めんぼく雪ゆきんもの」と、胴どうを据すへても齒はの根ねが合あず。間近まぢかく來くれば吃驚びつくり狼狽ろうたへ、「ア、く待まちやく。草鞋わらぢの緒をが解とけ」と、屈まむる弱腰じやく無手むすと取とり、うんとさし上げ、くるくると振廻ふりまし、大地あつちへどうと打付うちつけ、既に斯かうよ、と見みへけるが、天雅あめわか透すかさず飛とかより、只一討ただと振上ふりある、太刀たぢの柄無手つかひずと摺すんで引寄ひきよせ、兩ふたの膝ひざに引敷ひきしいたり。雅みや「ヤアどつこい、己おのれに敷しかれうか」と跳返はねかへさんくと揉合もみあ共ども、大盤石たいはんじやくを負おふ如ごとく、眼めも飛と出る計はかりなり。素戔そさ鳴遙なをに御覽ごらんじ、百獸ひやくぶの洞ほらの内うち、獅子ししの猛たける如ごとくにて、一文字かずなに駈付かけつけ、三熊さんくまが項うなじを摺すんで輕かろ々とさし上あげ、巖壁がんぺきにとんと打付うちつけ、胸骨むねほねをしつかと踏ふんで突立つきたちあり、怒いかれる御聲ごこゑにて、畜ちく汝に如何いかなれば我國わがくににあふれ出いで、岩長いはながひめ姫ひめと生しやうを替かへ、丸まるが預あり奉ほうる寶劔ほうけんを奪取だつしゆり、神國かみくにの寶たからを失うふは、國くにを傾かたぶけん爲なるか、丸まるが勢いきほひを押おせん爲なるか、庭上にわがみにて吞のんだる寶劔ほうけん何國なんこくにか隠かくせし。出いせや出いせ」とはつたと睨にらみ、退散たいさん魔軍まぐんの御足みあしにかけ、「寶劔ほうけん出いせ」と踏付ふみつけ給たまへば、通力つうりき自在じざいの三熊さんくまも、天孫あまみこと自然しぜんの威力ゐりきに押おき、苦くるしけ成息なるをつぎ、「あやら恐おそれ有あり。何ゆへにか此國ここのくにの神寶しんほうを奪うひ奉ほうるべき様更さまになし。彼の寶劔ほうけんと申まをは、出雲國いづものくに皺しわの川上かはかみ鳥上とりかみの嶺みねに、億萬おくまん劫ごうを隠かくれ棲すむ八岐やまたの大蛇おほろちと申まを、一身いつん八頭はつづつの大蛇おほろち奪うひ取とり、鱗うろこの皮かわ

どうぞけなう—
どうは登語にて
情なし

死なぬ例—死な
ぬ事はあつても
我言は偏なし

著到硯—受附の
帳面と筆硯

肉に隠し置。彼大蛇を滅ほし給はと、寶劔ふたよび神寶と成給はん事疑なし。全く我等が奪ふにあらす。命を助け給はれ」と、はら／＼溢す血の涙、鬼の泣のは人よりも、どうすけなふて哀なり。尊嘲笑はせ給ひ、「常座の命を遁れん爲、丸を欺く愚く。汝が奪はぬ證據を出せ」と、踏付給へば、三ア、申々、御疑ひ御尤。さりながら、天地の間の悪鬼惡蛇、同類同性とは申せ共、司る役々に替り有。我等は厄神の首領、四百四人の眷屬共、人間に四百四病を與へ、業の盡る命は取、非業の者は殺し申さず。神は正直、鬼神には横道なし。世界の人が無病で死なぬ例もあれ、微塵も偽り申さず。末世末代の人間、尊の御名を稱する者、守護神と成申さん。今の一命御助」と、首領が頭を下ければ、有合ふ眷屬一同に、「御免／＼」と泣聲は、數千疋の犬狼、一度に吠るが如くなり。尊得心まし／＼、「ヲ、いしくも申たり。助くべきものならねど、寶劔は八岐の大蛇が取たと告知せし恩賞によつて、眷屬に至迄、此度の命を助け置。重て我國に仇をなさじと誓の手形、天照神の御神制に任べし」と、肩骨擱んで投退給へば、三有難しく。命助る手形なら千枚でも致さん」と、眷屬共も活々と、悦び勇み跳廻る、鬼師とも云つべし。鰐香背天稚聲をかけ、「ヤア／＼御前成は静まれ」と一紙の卷物、著到硯。「一疋づつ罷

禮の賢一執下し
の藥
ふじ三里一灸
所、陰關節の下
小袋一罌丸

山梔一黃色にて
言はぬにかく
も吸物一も推量
にかく

桑の箸云々一半
身不隨にて箸も
左に持て食ふ
かも瓜一臍にか
けて冬瓜喰うた

出、名乗て手形仕れ」鼻あつ」と應へて歩み來る。白髮交りのおどろの髮、杖に縋つて屈み腰、鴈「彼奴は鬼の家老かや。如何成病の神やらん」鬼さん候。某は冬の雪の夜秋の霜寒氣の折々虫と成、鰐香背殿の腰の廻り、御見廻申せしお名染の疝氣の神。御見忘れは曲もなし。當代人間賢しくて、胸へ上れば橙の實、足へ下ればふじ三里、灸と針とに行方なく、近比慮外な小袋に、屈みまする」と顔しかめ、手形押てぞ入にける。次に出しは日の内迄、眞黃に染る朽葉色。木の葉衣の裏ふれて、黃成涙に袖濡れしを、天稚きつと日利して、「疑ひもなき黃疽神。汝が手では判の色も違ふべし。念を入れて手形押せ」菓扱も見脈お見立の、奇成哉妙成哉。別ては何うも山梔色。只御推量お吸物、我等が禁物、名を聞ても蜆汁、殻も怖いあら怖や」と、手形押く押分て、ぶりく慄ひ出たるを、鰐香背早く聲をかけ、「我も日利は劣まじ。邪氣瘧の眞最中と、見た目は三寸違はせぬ。如何にく」と問かくる。鬼いやく大きな藥違ひ。某は中風の神、名は半身と申者。桑の箸さへ左の手」口を歪めて入にける。續いて見えしは水膨、はつたりく腹の皮、可笑しさこらへて天稚彦、「いはねど水腫脹滿神」二人申に及ぬ」鬼の口、とつてかも瓜山牛房、藥喰の其印、押せば押手に水垂りて、判も薄墨片隈から、亂れ髮に幣切懸け、

印に水垂るとな

虚勞、精神衰弱
の病
内瘵—そこひに
て眼の見えぬ病

此横敷云々—此
横敷を導があれ

けへんくくと喘上て、鉢巻水鼻誰やらん」鳥されば候。何がしは暑や寒やの風の神。手療治の薑酒、敗毒散に追出され、一汗さつと流れかよりし橋杭の、悔の八千度百度も、送られました」と押しける。其外癰疔腫物の一統、虚勞陰去火動神、腹痛頭痛の頭神、急難急病内損外損、内瘵癰の神に至る迄、残らず手形を顯せば、巻軸は首領の三熊、左右の大手をしつかと押し、「芦原國の人民は、無病息才延命」といふ聲計、一紙に残り、立舞ふ霧の殯山、悪鬼は消て失せにけり。尊は猶も御威勢の、慶賀の聲や勝どきの、ウタイ聲に打添ふ松の風く、靡く草木や日月の、簇をなびかせ三重歸洛有、尊の御威勢隠れなく、天津兒屋の臣勅諛蒙り、梓川原に平張打せ、文武の下司左右に従へ、棟梁の臣下の預り、天の逆矛、屋形紋の錦に恭しく、其身は床几に悠々と、尊を迎へ待給ふ。先陣の天稚彦、いきりきつて走付、「ハア兒屋の臣の御出か」と横敷の前に膝を突き、稚君此度悪鬼を鎮め、御凱陣隠れなく、悦びの御迎ひと相見へ、御念入段御苦勞千萬。いやはや近國の悦び、お通りの道筋、士民、姥囃童迄が、「御恩の爲、道を清める。箒よ棹よ」と、足を空に駈廻り、所々の領主、郡主が出迎ひく、一樽を捧け御馳走、御内の我々迄、行先の御酒で道ばか參らず。此横敷、尊あれより御覽じ、「又隙とつては都入延

より御覽じてと
なり、
したくめよし
充分食事をした
と也。

端出—なひたる
繩の尻を房の如
く下げたるもの
又な—なは感
詞

引す。先へ走て理り申せ」との仰せ。兎角お隙の取れぬ様に、一刻も早く御歸洛有が御馳走。ざつと御悦びのお盃計。お吸物など御無用。諸軍勢も認よし。何にもお構ひなさるよな。はれやれ大きなお心遣ひ。ヤはや御簇の手の見へたれば。御馬も近付候」と、聲も雫雄素戔鳴の、お馬も進む響の音。凜々たる威風四邊を拂て見へにける。天稚かくと披露申せば、手綱を控へ、彘是迄の出迎ひ過分く。思ふ儘に悪鬼を鎮め、國靜謐推量せられよ。片時も歸洛急ぎ度、殊に凱陣の路次、馬上容赦に預らん」と乗出し給へば、天津兒屋飛で下り、端出の一五三繩引渡して、道の真中を遮り、尊に對つて大音あけ、兎和君も二柱の御子、天照神の御弟なれば、御存知の事ながら、此一五三繩は、日の神窟を出給ひし時、我等が先祖此繩を引廻し、又な窟へ入給ふな、と奏せしゆへ、神も此繩越へ給はず、長く此國に留り給ふ御一五三繩。サアならば越へて見給へ。都の方へは一足も叶ふまじ。日月の御簇を渡し、遠き韓國根の國へも逐電あれ」と、案に相違の顔色。尊を始諸軍勢、惘れ果たる計なり。尊馬より下立給ひ、「心得ぬ事を聞物かな。過り有て越るならば、法を越へ、制を背共云つべし。宣旨に任せ悪鬼を鎮め、手形をせさせ、凱陣する素戔鳴何事かあやまる。踏越へて入洛せ

猿の面笑一語にて自分に缺點ありながら他人の缺點を笑ふ事、猿が自分の面の赤きを知らずして他の猿を笑ふ劫一功か

桑の立木一雷は桑を思む事前にいへり

ん。サア來れ軍兵」と既に御足を止給へば、兒屋の臣太刀を手をかけ、「ヤア是々誤なしとは猿の頬笑ひ身の上知らず。美濃國の惡鬼退治を劫に立られんとはおろかく。其爲にこそ日月の御簀を預、軍勢を付られし上は、それ程の手柄はなふて叶はぬ筈。芦原國三の寶の其一つ、十握の寶劔、和君の好色戀慕より、化生に奪はれ給はずや。既に出陣の時、此寶劔取らずんば、帝都の土は踏まじ、と天に仰ぎ地にむかつての誓言は、サア覺へてか、忘れてか。誓を背き、手振て歸つて神の式を越へんとや。僅か細き繩なれ共、一筋是を引時は、内有外有、上有下有四方有。繩を取れば内外上下の分ちなく、間も同然。是一心を表する繩。心に一五三を引時は、主從親子、忠孝禮義の分ちを知。是を分つて神共いひ人共いふ。分ち知らぬを鳥類畜類と名付たり。今畜生の數に入て、越へ度ば越へられよ」と、一言四海を覆ふの詞、理りかな、末代日本文武の政を司どる、攝政關白の元祖、春日大明神と顯れ給ふは、兒屋の臣の御事なり、誠の道理にせめられて、さしにも猛き素戔嗚も、雲を放れし雷公の、桑の立木に挟まれて、苦しむ形も斯やらん、しほくとして詞なく、差俯伏ておはします。鰐香背篋掉取て搔込、「ア、正直過たり我君。常々申は爰の事。帝の爲には親同然の御身柄、開耶姬の戀慕、小女一人さへ御手

に入いれず、剩あまつさへおいのちまじ御命みことを的まじのかけ、惡鬼退治の討手、過分共御太義共いふ事か、息もつがせ
すまだ寶劔が足らぬとは、悉皆帝の使ひがらし。下郎下人を雇ふても、禮をいひ賃を出
す。徳もなきむだ働。同じ手間では此御籬を押立、棟梁顔する兒屋の臣を討て捨、直に
都に切入、瓊々杵帝を追下し、君御位に即給はど、后も寶劔も、るながら天下は御心の
儘ならずや。エ、いひ甲斐なき御所存や。御謀反思し立給へ」と、鰐が見入し悪性根。
尊殆ど打領はさんうらうなづき、「馬引寄せよ籬揚よ」と、御謀反の氣さし顯れたり。天稚彦、鰐香背が持
たる籬掉はたごひつたくり、御膝本に突懸り、大地を叩いて、稚エ、く口惜の御所存やな。
厄神共やくじんに手形をせさせ給ひしは昨日今日。其手形は何の爲。日本の人民を惱さじ、國の
妨致さまたけすまじとの手形ならずや。今御謀反の思ひ立、天下を覆へすは國の妨民の煩ひ。
鬼畜きちくに劣りし御心。甚深不測の了智を具へし兒屋の臣を輕んじ、虫同然の鰐香背風情に
云廻され、天孫の御身を危ぶめ給はん淺ましさよ。御爲大事と存るゆへ、慮外の詞御免
あれ」と涙を浮め申けり。尊大きに御氣色損じ、「諫言立聞にくし。鰐香背は命にかへて
の忠節。己は命を惜み軍を恐れ、忠節に託け身を遁れんとの諫言。卑怯者臆病者」と、
御足にはつたと蹴散し給へば、起直つて鰐香背が襟髪えりかみ擱んで引寄せ、胸板むねいたに乗懸り、心

三刀四刀―原本
刀を力に作る

うぬが―自分が

感涙をかけ―涙
を流す
天逆矛―神代の
矛の名

元を三刀四刀指通し、返す刀を其身が鎧の引合せ、肋をかけて突込だり。士卒慌て駈寄るを、稚ア、寄るなく」と押留め、假屋の方を後目につけて、「愚人千人萬人より 兒屋の臣の思召、黄泉の底迄恥かしし。命を惜み、軍を恐るゝ臆病とは、余り成仰やな。十一歳の春より、片時お側を離れず宮仕へ申せ共、斯く情なき御詞、終に耳に觸もせず、非道の御謀反に討死せば、何ばう命惜かるべき。うぬが身を立ん爲、悪事を勸むる鱧香背を、君忠臣と御覽有。我等は不忠佞人と見て、討て捨腹搔破り、命を捨て諫言申、臆病者の所爲を御覽せ我君なふ」と、諫言は磐石の、詞は重く一命は、露より軽く消にけり。天津兒屋も兩眼に感涙をかけながら、尊の前に突立、是此御矛と申は、女神男神の御代を治め給ひし天逆矛の御形。執權の家に預り傳へ、國の賞罰是に有。尊の咎を今打杖、姉御神の御手を貸給ふぞ」と追取伸べ、ちやうくはたく打や現共、夢共分す忙然と、忽御心翻り、退去て逆矛頂戴有。返し捧ぐる御簇の印、輝く日月と、共に晴行御心を、諸卒も「あつ」とぞ感じける。尊盡せぬ御落涙、「兒屋の臣の誠の杖、天稚彦が忠義の自害、我父母の教も此上の有べきか。寶劔を取返し、身の過を解く迄は、供も連も頼まじ。只我一人身を懲し、形を苦しめ心を痛め、雨に打れ嵐に臥、天地の責を受けてこそ、

雨より云々雨
よりも天に恐れ
て冠を著くるに
忍びず竹笠を被
ると也

玉水の云々か
かるに斯るをか
く、諸冊二神天
環牙にて海を探
り其環疑りて磯
取盧島となる
田かせは一耕せ
ばか
八束一ふさく
と丈の長きを云
暗がり一遅緩な
るを暗がりより

罪も少は晴やせん。暇申」と出給へば、兒屋の臣も悼しさ、破れし賤の簀笠を、旅の宿
と參らすれば、共に涙の雨よりも、天を恐るゝ竹の笠。昨日の冠引替り、國を憚かる
膏義は、今朝の錦の移り果、高き位は時の間に、賤の奴と窶れ行。猛く賢しき力にも、
押に至まぬ逆矛に、打ると君が非をあらため、臣は諫めて打杖の、盡ぬ名残や溢ると涙、
包むに餘る雨雲の、立別れても天地の、誠の道の末直に、引一五三繩や永き世の、人の
掟と成にけり。

第三

ウタイ芦原や天地人も開け初め、榮ゑにけりな逆矛の、雫の玉水のかよる時しも生れ来て、
民も豊に田かせは、稲は八束に粟麥も、賑ひ勝る秋津洲や。吉備國の百姓、食保の長が
惣領巨旦將來、近郷一の田地持。數多の家子下男、まだ東雲の暗がりより、引出す牛の
犂や、擔けて出る鋤蹶の、苦は人間もかはらめや。巨旦將來養子字賀石いざなひ、油
断させぬ人仕、「ヤイく男共、田も畠もくいさいた様ではかが往ぬ。樋の口通りの八反
田、今日晝迄に鋤仕廻、山續きの麥畠水溜るな。畦々一蹴入れ、随分水に油断すな。麻

牛を産出すといへば男共の怠慢を掛けて云へり
 ゴベ、く、ーぞろ、く、長い着物きてゐる事七歳一ないにか

見るやうな一さぞ寵愛せらるなちん其が目に見える様也

も追付蒔時分、東の岡に蹴の刃を絶すな。茶園の草引け。豆小豆の芽を雉に喰すな。苗代の鳥追へ。和郎共は牛の食物、事欠ぬ様に堤べりの草刈れ。これ宇賀石、百姓の子は小さふても、ぞべくくと旦那顔して埒明ぬ。尻引褰け籠擔け、大恨引て持ならへ」と、何の用捨も七歳子の裾捻上、蹴で突出す太股は、引大根より細からめ。妻の五百機走出、「何程大事の大根にて、彼の子が引ねば叶はぬか。五年以來夜泣して、色悪ふ瘦る子を、風に當て、露を踏せてよい物か。内との者共早う往け。いとし者を何の畠へ遣ましよう。是奥へ往て、温にして遊びやいの」と押遣れば、耳いやく育が甘さに病者に成。只養ひしようより、畠に立せ、鳥威しにでも仕てのけたが能いわいと、愛敬なき夫の顔、見る日の中は涙ぐみ、妻「今更云ふではなけれ共、つれないさもしい心かな。夫婦中の子ならば、さぞ寵愛を見る様な。弟御蘇民將來様の獨子を養ふて、胤腹はかはれ共、水入らずの甥子ぞや。育てに物が入事の、父御様の養ひのと、弟御様の田地も上田残らずねだれ取、其上に奢者、榮耀者、讓の田畑も失ふた、と耳も聞えぬ父御様へ弟御を讒訴し、親子中を割きながら、さらば此方が孝行でも有ことが、著類食物、不自由な目を見せまして、罰も冥加も思はずか。殊に我身、此ごとく懐胎身持に成しより、人共

兄親と云々―兄
や親の事なれば
と我慢する
夫の懸毀云々―
世間では夫の懸
口を我に隠す故
夫婦共に邪見に
見られる
道だて―道を守
りて貧乏する

水共知れぬものを惣領に立たさ。宇賀石が疎ましく、科ない子を憎み立て、生ふが死
ふが、有なしに育てば、人はおろか草も木も、雨風を防がねば、色美しい花は咲ぬ物。
蘇民様は兄親と虫を殺し給ふ共、婬の恨世間の口、夫の懸毀包む故、共に邪見の浮名
を取、迷惑は我獨。田地も返し、弟御の身代立てば、父御の孝行其身の威勢で有まい
か。眞實の異見する者は、女房ならで外にない。少は聞入あれかし」と諫めかねてぞ泣
居たる。耳、ヤア聞共ない又しては同じ事。人に褒められ、兄弟思へば損がいく。弟の
蘇民將來が道だてひろいて貧乏かはく。此巨旦は、人が憎み譏つても持たが病。仕合と
親父は、何が何うやら聞ずに濟む。内義の御異見聞手間に野を見廻し。一寸成共地
を廣げふ」と、立出る門口、弟嫁の賤機、にこくほやく會釋こほして、御機嫌取の追
従顔、「ムウ是は御夫婦ながら内方にか。少お見廻」と休らへば、五能ふこそく。余所
他人でも有ことが、遠慮なしにサア爰へ。蘇民様はお健なが。此方にも父御様始變る事
はなけれ共、只宇賀石の夜泣が、今に於て止まらぬ「賤ア、お前のいかひ御苦勞」五ア
、何んのいの。腹痛ますに和女に産で囉ふた子。それ程の苦をせいでは」と、婬中の睦
じさ。巨旦將來鼻に皺寄せ子細顔。耳これ賤機、百性の忙しい最中、爰等へ來てべら

一日が云々半
日にて耕し終ふ
となり

吐りこくつて
吐りとはす

べらと隙入て囉ふまい。いふ事濟んだらお歸りやれ」と、愛相なき詞付。肆如何にも御意の通り、人の手も我手にしたい時分、此方の蘇氏殿、作るべき田畑はお前に取らるよ。残て半畝か一反に足らぬ所、一日か日中にはつる鋤仕廻、永の日を遊んで居て行末の詰らぬ事。どうぞお情に半分ならずば、せめて三分一、田地戻して下さる様に、五百機様迄申せとの事。まだ此上に添て進上と申さば御機嫌もよい筈。取返すと申はお氣に入らぬと知りつゝも、云ねばならず、申も迷惑。我物ゆへに骨を折とは我々夫婦。ヤ何がな お土産と思ひ寄る珍しき物もなし。此お守は聞もお及なされたか。素戔鳴尊様寶劔とやらを失ひ、大内を追出され、流浪のお姿で、二三日此方にお宿を召され、明日か明後日、出雲國へお立との事。則是は尊様のお寶、疫神の誓紙の手形。是を頂戴せし人は、惡病難病を遁れ、萬の災難を拂ふお守。宇賀石の夜泣、御老躰の父御様、御夫婦も戴きて、息才延命成様に、暫しが中申下し、借受て参りし」と指出す錦の袋、巨旦將來悦び三度に戴き、「是ぞ内裏に傳はる三ツの神寶の其一つ、神璽と申天下の寶。四五日以前雨風烈しき夕暮、簀笠惜れし旅人、一夜の宿と頼しを、非人か又は盜人の引入かと思ひ、擲かぬ計に吐りこくつて追出した。エ、残多い。聞ば素戔鳴尊蘇氏が方に泊たけな。蘇

方圖一限り
ぬつくり云々
うまゝ尊に持
たせておく

わくりーむしや
ぶり付くの意な
るべし
もどくー非難す
る

輕薄一追從

民のたわけ、此寶を奪取、帝へ上れば御褒美恩賞方圖は知れぬ。是をぬつくりと持せて置、其律義から貧乏する。今巨旦が手に入は招かぬ福徳。此寶を以我も巨旦大王と呼れ、大國所領の主と成時、筵二三枚敷の田地は裾分しようど歸つて云へ」とつよと立、入らんとするを、五百機驚きわより付、「餘りな無理無躰。穢い欲心持ふより、いつそ奇麗に盗したが能いわいの。サア返しやるかサア如何ぞ」耳エ、男をもどく出過者」と、はつたと蹴のめし入れれば、五、テ、踏れうが打れうが、非道をさせて見ては居ぬ。賤機様恥かし。常住我儘ばかり。明ても暮ても云合て居るはいの。待て下され、取返して遣ふぞや」と續いて奥に入にけり。賤機憫れ氣も上り、「エ、悔しい事をした。心を宥め田地を取輕薄に、大事のく天下に一つの御寶を借參らせ、ふかふかと手に渡せしは何事ぞ。此身をす々に刻まれうが、微塵に碎かれうが、取戻して尊様へ指上いで置物か。多年の恨、夫婦が胸に積れ共、獨子を養はれ、慘ふ辛ふ當らふか、と無念を押へ打過しは宇賀石といふ質を取られ居るゆへ。其無徳心からは、定て宇賀石も殺してがな捨つらふ。サア其守り戻しや。但それへ踏込で、聊爾をするが合點か」と、思ひ切たる面色にも、我子は如何にと、あたりに目をぞ配りける。巨旦將來、宇賀石小脇に提げ、「こりや、此餓鬼

目づくつた一目
は芽にて振ん
だ

火焰の中一危き
所

奴養ふも田地取らふ爲。女房の腹に惣領が目づくつた。彼奴はいらぬ、連て歸れ」と投
 出す。賤「ナ、返さず共連て往く。此子を取れば氣が廣ひ。もう樂じや、これ巨旦殿兄御
 殿、蘇氏將來を弟と思ひ侮つても、魂が有ぞや。今の寶は申に及ず、田も畑も、藪も林
 も、今の間に取返して見せう。待て居や」と断出る。五百機走出、宇賀石が兩足しつか
 と抱き、五「待て下され賤機様。惣領に立んと契約で囉ふた子。今戻して二人の親世間へ
 顔が出されうか。身に宿りし子種を湯水と流し捨る共、世繼は此子。其儘置て我々が一
 分立て下され。守りも何も呑込んだ。此五百機が返さず」と、引留むれば、賤「なふ恐ろし
 や。大事の子、火焰の中から拾ひ上たと思ふ物。片時も爰に置ふか。サア其處を放しや」
 五「イヤ放さぬ」と、兩方義理と恩愛に、涙手詰の宇賀石が、「母様のふ」と歎聲、巨旦將來
 守刀、提げ、「ヤイ女奴、胎内に惣領持ながら、彼奴を留て何にする。放してやらすば此
 餓鬼奴胸中より切放す。サア何んと、サア何んとこりや／＼／＼」と、閃す、刃も危し放
 しも遣す、只「はあく」と身を冷す。耳エ、あた面倒な」と振上る刃の影、さすがは産
 の母心、我子を悲しみ堪へかねて、放す拍子切る拍子、二ツ拍子の間違ひに、跡を切た
 る切先、椽樞に切込んで、抜／＼と悶く間に、母「どっこい」と搔潛り、嫂の手をも

井手云々―水門
を閉ぢて水を田
に入るゝ

米麥―八十八歳
と米とかく

若草―若いにか
けて足の輕く上
るといふより雲
雀と續け水鏡と
いふより顔と連
ねたり
遠山松云々―遠
いにかけて永の
年數を經てもと
也

ぎ放し、「頭の堅き宇賀石」と、抱しめく、こけつ轉んづ走行、心嬉しや三重歌、在所女郎衆
は皆美ひ聲で、一に麥歌ナ二に茶摘歌、三に早苗歌、四に仕事歌、歌で石うすかろぐと。
サンヤレさ、かろぐと」佃鎌の柄や長き日に、畑打賤も肩脱て、温氣成春の水、井出
の樋の口堰入て、爰に彼處に小田かへす。東田も五反田、西田も五反田。中の畦道來る
人は、巨旦、蘇氏兄弟の父食保の長。齡も今年米麥の、田畑見んとて鳩の杖、まだ足元
は若草に、揚る雲雀の水鏡、顔は老ても目性能、耳こそ少遠山松の、霜雪經ても膝腰は
根張強成柳影、四方を詠て休へば、嫂五百機敷物かたけ、「おういく、是はまあくお
年寄の何時の間にやら、人も連す危なやく。爰で少お休み。酒はあがらず、お慰みに
煎じ茶でも。茶辨當いひ付まじよ」と、いへ共耳の余所に吹、父ヲ、風も無ふて長閑な。
去年の何時からか久しう田畠を見ぬゆへに、よろりくと出たれば、又わつさりと氣が
晴た。堤の芝が青々と、躑躅杜鵑花が早咲たの「五」さればく梅や櫻が散れば、菫蒲公
英花は絶ゑぬ。氣の養生に成まする「父」ヤアく何と云やる「五」ア、辛氣やの。是梅や
桃や櫻が散れば、菫蒲公英花は絶ゑず、氣の養生と申事「父」ヲ、く能ふ知てじや。梅干
を酒鹽で喰へば痰の藥。去ながら、もう此年で養生して何にしよ。腰膝拔ず、心面白い

ころりとやる—
死ぬる事

虫強い—堪忍づ
よ

味もしやとりも
—味も何もない
登下り—下りと
登廻とかも

埴安地神—土を
守る神

時、ころりとやれば果報くく「五、イヤくくまだ十七八年も置まし、腰膝立たずば抱て歩きます」父、ヤなんじや。十七八の腰本置て抱て寐さしよ。ハテ譯もない、途でもない事云やんな。いかな虫強い腰本も、此爺と寐たらば、破れ障子で骨計。味もしやとりもおじやるまい。なふ恥しやくく」と笑へば嫁も吹出し、畑打賤も蹴を捨、腹を抱へて笑ひけり。五、やれくおかし親父様、餘り笑ふて胸前も晝下り、休み時いざ来いと、皆皆打連れ立歸る。四邊を見廻し、父、ア、思はぬ笑ひに老の憂を忘れしぞ。なふ面は笑へど、心の底はおかしくない。此堤の四方八町に五町、家に傳はる我田地、隠居の時三分に割り、二分は惣領役、そなたの夫巨旦將來に譲、三分一は弟の蘇氏將來、彼の樋の口から向ふの松迄一霞譲りし上田。口に榮耀身に奢り、皆他人の手に渡し、身代ちんぶらりと聞より内へも寄せ付ず。田地を見るも情なく、此邊足は向ね共、今日ぶらくくとはへ来て、ア、重代の田地、余所の物になしたよな。此地の底にまします埴安地神にも見放され參らせし、と歩み來る踵、釘針を踏む如く、一入脚もよろめきて、無念におじやる悲しい」と、涙に老を嚙ませて、聲をも咽に詰らせり。五百機ひつしと身にひどき、「おいとしや道理や。夫の欲心一つより、弟御のうき目親御の歎、云へば夫の惡名、包む

涙―無しにかく

鳥の跡―文字

かゝる―かゝる
に斯かる

ぼて―手を卑し
めていよ
ぬつぱり―きは
くしからぬ心
と偶言集覽にあ
りよい加減にな
り
野老―稗類に似
て不味なり

が道かいふが道か、誰に語りて智恵を借る。人も涙に暮れけるが、「いやく夫を世上に
誹らせ、女の道はよも立まじ」と、思ひ定めて、五「是申蘇民様の譲の田地、一寸も他人へ
渡らず。親御様の御異見にて、兄御より弟御へ憐みあれば、御一家すなほに陸じし。是能
ふお讀なされや」と、地をかきならし指を筆、書つく砂のこまぐは、磨る墨よりもあ
りありと、一字残さぬありのまよ。盡ぬ真砂も讀盡し、父は驚く鳥の跡、誰が呼子鳥何
時の間にかは巨旦將來、後の畦の柵につよ立、きつと見付る眼はさらに、それ共知ら
ぬ嫁舅が、鼻の先突たる鋤追取延べ、がはと打立、土砂かきまぜる土烟、はつと飛退く
顔に砂、かゝる子を持つチ、男持嫁舅こそ笑止なれ。こらへせいなき無法者、女房の頬先撲こ
かし、何何も知らぬ聲に男の身の上、能ふ告口ひろいだなあ。砂に書て見せうとは、
其惡智恵を身が持てばまだ分限に成はい。物書ほで打折てくれん」と、飛付處を父摺
付、元首押へて、父「こりや畜生奴、只今聞て驚ひた。數年ぬつほりと親を能ふだまし
たなア。女房を恨みず共、うぬが大惡大欲の魂は何故恨みぬ。弟の田畠貪取、養ふと
は何の親。此親を養ふに何程の田畑が入る。著せる著物の中入は薄蘆の穂。さもしいな
がら、朝夕の膳部も五穀は有かなし。皆椽の實野老の根。親にさへ是なれば、身の始末

神の鳥居の二柱
—鳥居の柱が二
本ある人は孤
立が出来ぬを教
へたるものと
也

とうく—どう
と響く丈で喘込
んで居れば猶聞
きとれぬと也

さぞあらめ。若い者の能い合點と、苦ひ口を甘ひ顔して見せつるは、己を人と思ひしゆへ。可愛や弟の蘇氏を裸にし、生る間もない親に疎ませ中を斷。さぞや蘇氏が親を恨みん不便さよ。宇賀石を返さば、強請取た大分の田島、何故附ては返さぬぞ。人を損ひ、獨世に立たいとて立れうか。神の鳥居の二柱、一人は立ぬ教とかや。天子の御寶、八咫の鏡と申は、善惡を照し給ふ神の御心、内裏に計有と思ふか。八咫の鏡は面々が頂く、彼の天にましくて、善惡を明らめ、罰も利生も頭の上に、忽來るとは知らざるか。我背中の垢穢れ、我は見ね共人は見る。心の内も其通。根性を直してくれ。親は他人の善人より、子の悪人がかはいひ」と、怒つ泣つ氣を揉上げ、口説き歎の親心、思ひやられて哀なり。巨旦肩を擡め、「女め能ふ頼けた叩いたなア。是親父、かう生れ付た巨旦、今更産もなほされまい。よしない子の世話やまふより、鬚を苦に召され」と、叫んでも喚いても、耳へはとうく瀧の音、喘逆せば猶聞へず。父「なんじや其頼付待て居れ。蘇氏に知らせ、一國に生恥かよせん」と、よろほひ出る嚳道、耳サア通つて見や」と、鐵横へ立塞る。父「己が遣らぬとて往まいか。此道から」と立戻れば、又行先を立塞ぎ、耳ならば手柄に通つて見や」と、振廻す鐵の先、父が胴骨はつたと打れて、畦の崖

雲の裏でも一ど
んな所でも

罰も云々罰も
咎もないものと
思うて

かたき石一敵と
堅き

よりどうと落、絶へぐ喘息づかひ。女房蹴にすがり付き、「狂亂か巨旦殿。親御に疵でも付たらば、雲の裏でも云譯は有まい。放しやぐ」と、捻合ふ間に父起直り、柵を便に取付、這上らんぐとする處を、巨「女奴放せ」と突退け、打て威すも不孝の罰の腕先狂ひ、父が耳の根がはと打込む、蹴の鐵や冴たりけん、覺えずゑいと引力、水も溜らず親の首、すんばと切れて飛たるは、劔にかけたる如くなり。女房夢の心地にて、「はあ」と計に絶入ば、傍若無人の巨旦も、惘れて顔の色違へ、戰慄顫ひうつとりと、氣もうろたへて見へてけり。五、恨めしい、罰も咎めもない物と、女房の異見を余所に聞、今思ひ當つてか。刃もない鋤で人の首が落るとは、日來の惡業惡心が積つて、蹴も劔と成親殺しの咎人とは天道よりなし給ふ。又此罪が胎内の子に報はん、淺ましや」と、口説き泣こそ無慙なれ。巨旦すんと立て、裾捻からけ脚踏しめ、「よいぐ胸がすはつた。皆女奴が口ばしから」と、取て押伏せ、腰の手拭口に捻込押込、願かけて引括り、帶引解き、後手に縛上げ、「こりや、逆も惡人の名を取た此巨旦、父の死骸を蘇氏奴が畠に埋、咎を弟に塗てくりよう」と蹴提け、善惡二ツの晴境、果は我身のかたき石、地をほり返しく、掘るより深き罪科の、土も砂も身にかよる、後の報ひぞ恐ろしき。土搔上る向

是はならぬ—是
はどうもならぬ

稻村—往なれず
にかく

盡せねど—どは
とか

ふの道、牛追ふて來る人は弟の蘇氏將來。馬ヤア是はならぬ」と胸騒ぎ、骸を取て引ずり
寄せ、「血性が脱て、早い骨の硬い様」と手足押曲け骨打折り、首投入れる苔の下、漸
埋み、踏付くかきならし、足跡隠す島土、これ悪業の種蒔と、思ひ知らぬぞ愚成。猶
も近付牛の聲、素振でも見られては身の一大事、何國に隠れん木陰はなし。道は一筋、行
も行れず、いぬるにも稻村の藁引のけ、女房引立押入て、上には藁を引繕ひ、我も木陰
を狩場の雉の、命大事と身を忍ぶ。忍ばぬ世さへ貧しきに、蘇氏夫婦が情深く、素戔嗚尊
に假の御宿參らせ、今日出雲路に八雲立、道も野飼の牛の鞍、お腰を暫し掛巻も、冥加
の爲と送り行。夫が牛の綱取れば、賤機御笠箆を持、主君の如く敬ひし、心の内ぞ頼
もしき。蘇氏牛を引留め、「見へ渡りたる此野邊は、残らず親の讓の我地にて候ひしを
兄巨且に掠められ、我等の地とては是限り。兄の地を我牛に踏せんも如何なり。是より
は御徒歩にて、何國迄も御供と存ずれ共、兄に取られし悪鬼の手形を取返し、跡より追
付奉らん。出雲國皴川手摩乳が妻、足摩乳は此賤機が叔母なれば、かくと告て御宿召さ
れ候べし。暫しも別れ奉る御名残こそ盡せね」と夫婦頭を地につくれば、尊牛より下御
成て、「ア、扱も世の人の心には品々有。過し雨の夜旅疲れ、巨且に宿をもとめしに、つ

牛の角文字一の序におきたり
 牛角はい形なる故(徒然草)
 させいほう一牛
 追ふ懸壁、馬ど
 うくさあ勝つ
 たりく牛博勢
 させいほうせい
 く(綺狂言記)

れなくも追出せし其恨。如何なればお事夫婦、かく迄深き心ざし、何時の世に忘るべき。
 我寶劔を取返し、三種の神寶揃なば、此恩は報ずべし。それ迄の契約、一つの祕事を傳
 へん」と、畔の柳を手折らせ給ひ、これを削小札となし、紅の總を付、蘇民將來子孫
 なりと書付、幼き者の襟に付よ。疫病、瘧病、疱瘡赤疹、一切の悪病を免るべし。無道
 の巨旦が掠取たる疫神の手形、彼等が爲には守とならず、其身に災難來る事、三日は過
 まじき。正直の人にこそ守の印も有と知れ。百姓をさして天の下の御寶とは、天照神
 の御神説。農業耕作怠るな。さらばく」と、簀笠携へ出給へば、夫婦は盡ぬ御名残、
 「御機嫌能御本望。やがてく」と見送るも、聲も霞に別れけり。蘇民なんと女房有難
 い。不思議に高位のお宿を申、蘇民將來子孫とあらば、悪病難病拂ふとのお詞。末代の
 寶とは此事。殊に百姓を御寶と大神宮の御託宣、耕作怠るなと結構な教。稼に追付貧乏
 なし。サアく油断ならぬ」と耒耜の、「牛と思ふな牛の尾も、べらつきや遅ひ。牛の角
 文字急げば急ぐさせいほう。精出せば野らの荒地も上田」と、妻の賤機立寄て、身の上
 に引田の草も、茂る菜種の畦合を一蹴返す土の下。是のふ此方の人、それ其島に人の
 手足が生出た」蘇やれ籠相いふな女房」と、振返つて横手を打、「こりや如何じや。大事

五音一言葉つき
わごりよ一貴様
塗る一かぶせる

の島何者の仕業」と、鋤蹴入て勿返す瘦骸、我親ぞ共白髮首、鋤にはねられ蘇民が身に、はたと當て落けるを、よくく見れば我父なり。「ハアはあ」と計に鋤蹴捨て、骸に抱付わつと泣、顔を見てはわつと泣「如何なる奴が手にかかし」と、駈出しては立戻り、走出てはどうと臥、夫掃足摺身を悶へ、島の土に轉び打、大聲上てぞ歎きける。巨旦將來驚ひたる顔付にて、「ヤアく蘇民、昨夕より父が見へず 人を配つて尋しに 見付たく。親殺しの大悪人、後日の罪科あらがふな」とぞひしめいたる 蘇ム、ウ兄が 人我殺して我島へ晝中に埋まふか。世話焼やるな。其五音で殺し手は知れたく」馬知れたとは誰が殺した」蘇ヲ、殺し手はわごりよじや」馬ヤア孝行第一の巨旦に塗たとて塗らしようか」と、争ふ中稻群搖ぎ、積たる薬はどさくと、崩るよ中に嫂が、聲立てられぬ身の 柵 賤機これほと走寄、口の轡も縛目も、かなぐり捨てれば片息に、五是蘇民様の業でなし。夫の不孝惡逆、證據は連添ふ女房。是は大事の寶の守、是を戻せば心にかよる事もなし。嗚憎からふ巨旦殿。人を恨むる事はない、皆此方の欲心から。身にも及ぬ帝の寶を押取て、巨旦大王といわれうなどは口吟にも云ふ事か。寢覺にも思ふ事かいの。其慾心の報ひが積り積つて、切れまい蹴で親を切。其欲心のもとはいへば、

眞の左鎌一誠を
示す左鎌と也

小膝云々一蘇民
が下りる途端に
切つればなり
のつけに云々一

胎内の此子ゆへ。此子は如何成悪人ぞ。手を出して殺さねど、腹の内から親殺し。祖父殺し。恨めしい子を宿したと思へば、搔破つても捨たい物。まだくと月日を待、産落して嬉しからふか。目出度からふか。此方の敵は此子じやが合點か。折しも稻群に鎌のありしは、連なつた親子夫婦が罪滅せとの、神の教天のあてがい。死んで見せる。是で心あらためて、親子の者にむだ死させて下さるな」と、腹に突立引廻す、母が誠の左鎌。賤機是はと駈寄て、留むる甲斐も涙の玉、草葉の露と消へにける。蘇民も鋤横たへ、「是女房、命にかへぬ御守、持てのけ」と聲かくれば、賤機心得身に引添へ、宿所を指てぞ走ける。蘇、エ、辛い惨い、曲もない兄じや人。とつく恨いふ事は、此蘇民も知たれ共、兄弟の禮といひ、父に苦をかけまひ、と我身獨誤て、送る月日に時節も來て、一度父の機嫌能い顔、見ようくの頼もけふにふつつと斷れ、今日から赤の他人。眞劍で出合ふか。但鋤の刃を喰ふか」と、詞を荒して罵つたり。馬、ヤ己に先をせられふか」と、打懸る蹶の柄、からりと受で打拂ひ、閃と廻つて打鋤に、巨且が小鬚打裂れ、崖より下にとうと落つ。上手より重ね懸、打んとする弟が、向脚くはらりと打裂き、小膝を突るて下り様に、兄が太股貌の口程切下られ、のつけに返せば突懸り、臼搗打に打鋤が、餘つて向ふへ越す處

仰向にそるを弟
が打つ其鏃が向
ふへ飛ぶと也

水なき云々一見
ずにかく、井出

を、起直つて、弟が頬先より肩口迄、引かけて引鏃に、よろ／＼とよろめきながら、
兄が天邊を打裂ば、弟も眦を打破られ、兩方數ヶ所の手疵を受、兩眼に血は入り、眼
は暗闇身は紅、疇の柵踏類し、堤を下りにころ／＼と落重り、敵合ひ掴合ひ、這
上れば轉び落、他人まぜずの挑合、命限りと三重見へけるが、兄はやう／＼這上れば、
弟も息續ぐ堤の原、躑躅の花を引むしり／＼、口に嚙で咽濕し、命を繋ぐ花の露、兄は
片息、草に喰付息ついだり、騾おのれ親殺し、子殺し、女房殺し、遣らぬ／＼と這上
るを、島の土砂掴みかくるを事共せず、柵に手をかけ、真砂交りの壤を、兩方掴んで
打合しは、雨か霰の三重如くなり。賤機有にもあられず。走來て、「業人め、未だ死なぬ
か」と打かくる、鋤に恐れ堤をさして這下る。蘇民も賺さず這下て、堤の原を西東、逃
るも追ふも深手に弱る。上には賤機、鋤を横へ待かくれば、逃るにわきひら水なき井出
の、小川を越へて逃んとす。蘇民聲をかけ、「やれ樋の口抜け女房、樋を抜け／＼」騾ヲ
、合點」と走廻つて、女力も一世一代、貫の木に兩手を掛け、「ゑいや／＼」と引程に、樋
の口さつとさつ／＼、逆巻落る水とう／＼。川は狭し水は高し。餘つて瀬枕波枕、
岩も劈く早瀬川、渡らん様もあら悲しや、と籠の島に這上る。蘇民追付這上り、取て引

もちごもる一共に
頼る、身持腹
をいよ

月日の種一天神
の血統
著て見よ一來て
にかく
眞金吹一吉備の
枕詞

伏せ鼓き伏せ、咽笛に留めの鎌。則己が妻子の敵。神罰の程ぞあらた成。蘇氏夫婦は泣
泣くも、悲みは親恨みは兄、二つの涙に五百機が、哀れも共にもちごもる、三つの空瀬
を一つ野に、遺す形見や残りても、かひなき夫婦が立歸る、道は涙に迷へ共、身は正直
の道つくる、鋤と鍬とは耕作の、家の寶劔御寶の、手形を尊の御土産と、跡を慕ひて出
雲路や、神の心も忠孝の、二つを守る十寸鏡。扱こそ蘇氏將來の、子孫とめぐみ給ひ
ける。

・ 第四 素戔嗚尊道行

舞詞 去程に素戔嗚尊、蘇氏が宿を御出有、旅より旅に出雲路や、昨日の八重の白雲を、今
日の山路と踏分る。人目の關の關守も、咎むとしもはなけれ共、心と忍ぶ御有様、恐れ
ながらも哀なり。月日の種の御身にて、其影宿す露だにも、漏て溜らぬ破れ簑、著て見
よとてや酒折の、山は霞の海深く、嵐漕行く落葉船、水に鍬寄る翁、川、年は経れ共色
替へぬ、黒髪山とは彼れとかや。老の鶯名に恥て、聲な惜みそ眞金吹、吉備の中山中
中に、散せし花を春風の、又吹ためて石崎や、彌高山の松が枝も、二度花の盛見すらん。

中々に一なまな
かに
三つ一充つにか
く、一つは十握
の劔、
ますらも一ます
らを
涙一なしにか
く、白鷺云々は
際緖の前赤壁賦
にある句
枉の葛一常緑の
蔓草
殿の鼎云々一焚
く煎ずる何れも
霞を烟と見立て
ていへり

おき惑はせる一
霜の白と貝の白
と紛ふ

皺の川一非にか
く

蝶鳥の云々一花

見上れば久方の、高天が原は高く共、今の心をみそなはし、願ひを三つの御寶の、一つ
を守れ二柱、天の浮橋何時の間に、我爲辛き途絶して、思ひ渡らん便さへ、涙干す間を
暫しとて、脱ても元の菅叢や、姿計はますらおが、矢竹心を力成。梓が杣に行暮て、見
下せば、白露江に横はり、水光天に接れり。子を呼ぶ猿、斑鳩の聲、岸の小笹に刈藻搔
く、臥猪の騒ぐ音迄も、御心を碎く端となり、枉の葛、青つどら、歩み亂れて行末に、
岩ほの鼎、江戸古木を焚き、青山雲を煎するに、咽を潤す便もなく、猶人里は遠ざかり、
何ゆへ急ぐ雲の足、ウタイ嵐、山嵐松風が、ばらんくと吹音信るれば、峰の木の葉が、ざ
ららららと、散りらと、ちりらと水の音にさへ、假寐の夢を驚かし、寝ぬ夜寐る夜を
重ね来て、苔にかたしく袖師の浦、磯に寄来る、浮藻玉藻を打混て、まだみるめ和布を
打混ぜく、いろくくの、波や錦を疊むらん。眞砂交りの濱傳ひ、汐のされ貝空背貝置
惑はせる春の霜、宛がら刃の如くにて、歩み疲ると玉鉾の、牙先に向ひては、悪魔も恐
れ、鬼神も挫ぐ勢にも、御身一つの雪をさへ、拂ひかねたる簑笠や、身のうき事を繰
返し、數へくして思ふにも、理は持ちながら心から、皺の川上にぞ三重著き給ふ。歌蝶
鳥の花を尋ねて、埒もとむるしほらしや。蝶鳥も、花には濡るとに、我身は何と櫛の葉

花見幕—花見の幕にて風を防ぐ

まだ寝た云々—まだ寝て居る振して笠の下にて目をしばくする石たたく—鶺鴒の事、爰は枕詞

たいじよ立して—あやまちせて

の、露にも濡れぬ獨寝や。引すさみ、手を盡したる大和琴、音に聞えし出雲國、手摩乳長者が獨子稻田姫は、此比熱のさし引覺め口は、お風召すなと花見幕、皸の川岸の櫻狩、見らるゝ花も見る君が、姿の花に恥ぬべし。旅の疲のふらくくと居睡こけし岩が根の、枕が上の物の音に、尊の御目は覺ながら、まだ寐た顔の笠の下、瞬く眼元石たよく、鶺鴒の鳥飛來り、堤の芝に羽を休め、足も尾先も忙しなく、ぱつと立ては又飛下り、日陰にあさるとりぐくに、女房達「美しい優しい鳥、あの尾使ひの忙しなさ。あれ程に尾を動しては、鳴そな物じや」と、笑ひける。物をもいはず稻田姫、つくぐ見惚れおはせしが、「いやく、笑ふ事でなし。忝も女神男神、天の浮橋に立給へば、あの鶺鴒の鳥來り、妹脊の道を教より、夫婦契りをなし初、此荊原を産み給ひ、それより世の中の父母、夫婦の道顯れ、自や旁が生れ出しも此所謂、扱こそあの鶺鴒を、庭來鳴、庭叩、戀教鳥共云ふぞとよ。教ても習ふても、殿御持ぬ自が、習ふかひもないかいの。とても師匠に成からは男持たしや。今捕へて籠に入、たいじよ立して放さん」と心詞もしどけなく、そろりくと手を上げて、押ゆればふはと立、又押ゆればぱつと立。鴉ア、辛氣や」とて尊の召れし笠追取、彼方へ押へ此方へ押へ、逐はへ逐はゆる笠の羽風に、恐

ほの字―種と惚
れた意とかく

人身御供―人間
を神の生贄に供
する

るよ鳥は行方知らず、思はず知らず尊の上へ、轉びかよれば驚き起て、じつと見かはす
顔と顔、互に頷く花薄、ほの字を中に籠らせて、鳥の教へし縁の端、爰にも天の浮橋の、
夫婦の始と成にける。戀に凝りたる尊の心、又惚れぐと成給ひ、素御覽の如く卑しき
旅人、やんごとなき上臈の人目も有。其處退き給へ」と宣へ共、姫は兎角ふのいらへも
なく、ぞつと寒氣も忽に、顔色は朱を注ぎ、五射に大熱ほとをり出、尊にひつしと抱付、
悶へ苦しむ其有様。女房達も立騒ぎ、尊も見捨難ければ、手を引かよえ漸と、幕の
内にぞ入給ふ。母は驚き屏風押除け、母今日はよもやと思ひしに、又もや熱のさしける
よ」と、様々に看病し、「何方かは存ね共、旅のお方の御介抱、身にも餘りて忝し。問ひ問
はるよも値遇の縁。粗忽に申事ならねど、此國此處に八岐の蛇とて大蛇有。何時の世よ
りか年毎に、色よき娘を人身御供に取らざれば、一在所崇をなす。其印には山字津木の
折枝が、鳴渡つて棟木に立、家の柱より血しほ流れ出、其瑞相には前方に、必取らるべ
き娘が熱病を病む知らせあり。それ故に一在所娘持たる者毎に、風でも引て熱させば、
若し家の棟へ山字津木が立ふかと、親々の心遣ひは如何計。それに此子が熱のさし引様
様の看病印もなし。若もそれに極つて、大蛇が餌食と成ならば、二人の親は如何なら

ん。行衛も知らぬ旅人に、語るも云ふも悲しさの、心に餘るゆへぞ」とて、かつばと臥
 て泣居たる。八岐の大蛇が物語り、尊とつくと聞召「若や旁は、手摩乳長者の一家の
 人にては無きか。吉備の國蘇民將來が教にて、手摩乳夫婦を尋る者よ」と宣へば、母ナ
 フ其手摩乳とは夫の事。妾が名は足摩乳、此娘は稻田姫。蘇民が知邊のお方と有ば、外な
 らぬ所縁も有。憐み給へ旅人」と、又さめぐと泣涙、娘が苦む玉の汗、時雨村雨夕立の、
 一度に降來る如くにて、尊の旅の簑笠も、重て濡る計なり。尊包むに包まれず、「名は聞
 もしつらん。素戔嗚とは我事よ。身を燒骨を焦す大熱成共、忽退得させん」と宣へ
 ば、母は恐れて飛退り、頭を下て敬ひける。尊枕に立寄て、腰の御劔をすりと抜き、
 「抑此日本は、日の神の御國にて、陽氣盛んにして暖成事、天地の内に竝ぶ方なき國土
 なり。されば伊弉諾尊、軻遇突智といふ火の神を御誕生有し時、其軻遇突智が火焰に燒
 れて神さりませしも、内に大熱の火を包みしゆへなり。故に日本に生るよ者は、十六の
 夏迄は兩袖の下を、闕腋の脇明にして熱を漏し、涼しみを受ざれば、國と人と相應せず。
 然るを父母愛に溺れ、さなきだに實熱深き稚子を、絹に包み綿に巻き、熱に熱を添るゆ
 へ、寵愛却て愁の種と成ぞかし。今より日本の貴賤男女、我詞を式となし、闕腋を著せ

軻遇突智一此話
 神代紀に見えたり

闕腋一袍に縫腋
 闕腋の二種あり

式一手本

立所一裁つ所と
たちどころ

八雲立云々一夫
婦一つに籠らん
爲に八重垣を作
つてくれるよと
なり
むべも富けり云
云一此殿はむべ
も富みけり云々
の古今集の歌に
よる
つきつしー似
合ふ

させば、見よく、無病延命疑ひ有べらず。いで其印を見せんす」と、ほとをり冷す氷の御
 劍、閉たる左右の袖下、さらりくと立所に、鬨腕より燻り出、半天に煙滿ちくと、
 うす巻去ると見へけるが、顔色さめて白くと、心地涼しく見へにける。末代和國鬨腕
 は、此御神の教なり。母は悦び、浮きくいそく前後を忘れ、「ハア、有難や忝なや。此
 稻田姫夫もなし。恐れながら、尊様御逗留の御寐間の伽、お宮仕に參らすべし。早ふ歸
 り、夫に知らせ悦ばせん」娘は「道の知邊に」と、立寄れば立寄て、一首の御製に斯く
 計、「八雲たつ、出雲八重垣妻籠に、八重垣つくる其八重垣を」是こそ三十一文字の、歌
 の始や鬨腕の、袖と袖とや三重重ぬらむ、むべも富けり三枝の、三ツ葉四ツ葉の殿作り、
 築地大門つきくしく、庭は自然の植込に、海を見晴し山請て、居ながら風情を奥座敷、手
 摩乳長者が屋形には、尊の御入、稻田姫の病氣本服悦びに、猶悦びの饗應は、毎日酒宴
 に暮さるよ、主の長者もほろ酔ながら、「蘇氏將來が來りしとや、珍しやく」。案内所か
 へくと請じける。手先息災で目出度いが、親兄の事聞及び、日比の巨旦が悪心、そ
 ふあらふと思ひしこと。和殿が正直天に叶ひ、尊の御宿申されしは子孫の譽。尊も度々
 の御噂、先お目見へ」と有ければ、駭されば我等も數箇所の手疵に遭しか共、預り奉る

散々―餘程の不
機嫌

てがたまもり
手形守の威徳によつて、跡方もなく平癒し、御恩の尊御行末も氣遣、御跡より參らん、と
御契約申せしゆへ、本國を打立んとせし折節、帝都より大山祇と申臣、尊を慕ひ奉り、我
等に案内申せとの御頼。是迄お供仕る。是は又お預りの手形守。共に御披露頼奉る」
と、云もあへぬに長者悦び、「何大山祇の臣のお出とや。天下に誰あらふ、瓊々杵尊の舅
君、かよる邊土の我等が宅へ御尋も、尊の御威光嘸御悦び。此方へ請じ奉れ」と、勇んで
奥へ入にける。蘇民が案内に大山祇、家は長者が宿なれど、尊を敬ふ心によ、下座に控
へておはします。勇み勇める手摩乳長者、始の顔色引替て、澁々顔にて立出、「ナフ蘇
民、大山祇とは彼方の事な。我等は手摩乳と申者。遙々の御出、尊へ申上る處、いか成事
にや散々の御機嫌、煮、大山祇の臣ならば、詞もかはさぬ顔も見ぬ。戻せ」との仰。我
等もはつと存、「同道の蘇民に御憎しみばし候か」と、押かへし問申せば、情をかけし蘇
民に何の恨の有べきぞ。丸を輕んずる大山祇、何の對面追返せ。年寄てくどく」と、
却て我等を御叱り。お歸りと申も迷惑。同道の蘇民も嘸迷惑。エ、近比氣の毒」と頭か
く、手摩乳長者が白髪より、座は白けてぞ見へにける。大山祇手を打て、「ハア御恨思ひ
當つたり。我娘木花開耶姬に尊御心を寄られしを、其かひもなく帝の後に奉る。是は勅

歩障一衝立

云れぬ事の無
益な事である上

説詮方なし。又寶劔の失ひ給ひしも、化生の業とは申ながら、我娘岩長と生れ出での禍
 ひ。御加勢申、此寶劔を取返さでは、末代までの身の恥辱。此處に骸は埋む共、一度御
 目にかよらでは、都へ逆は歸るまじ。今一應申て給べ」と、思ひ込んだる兩眼に、涙をは
 らはらとぞ浮めける。洩聞えてや女房達「尊の御出」と呼はつて、子細は何と白綾の、歩
 障を中に押立てば、大山祇力を得、主手摩乳、蘇氏將來、あつと頭を傾くる。始て著な
 す脇明の、田舎めかすも稻田姫、尊の仰を蒙りて、歩障の影より聲作り、「ナフ大山祇、丸
 は素戔嗚の尊じやぞ。寶劔を取返す力にならんとて遙々の下りか。云れぬ事の。人頼す
 る程なれば、流浪の身にはならぬ。丸が一人の力にて取返し、此寶劔は素戔嗚の尊の手
 から出たと、末代に名を残して見せう。それ迄は都の人に逢ふまいと、天照神に誓を立
 たれば逢ふ事はならぬ。殊に后にも立開耶姫に心を懸け、上への恐れ、今での後悔、其
 開耶姫が親に逢ふても、どうやら心が残る様で異なるもの。其上開耶姫よりは、手近いに
 折好い蕾の花が有て、寐ても起ても詠て居る。此蕾が格氣深ふて、外の花とは一ツ瓶
 にも生させぬ。蘇氏は情を受た者、其外は、舅の長者ならでは對面せう由縁がなひ。早
 ふ往にやく」と、形も見せず顔見せず、詞て人に鸚鵡の鳥、梅の鶯山鳥、眞似びか

鸚鵡云々一逢ふ
 にかけて其鸚鵡

が鶯と鳥の聲を
二つ兼た如しと
也

ねたる如くなり。母足摩乳、銚子盃携へ出、「大山祇様とや、妾こそ足摩乳。お心の
本意なさを推量いたし、思ふ子細の候へば、先御酒一つ」と羞むれば、大猶心得ぬ事か
な」と、思ひながらも長柄の銚子、一つ受たる盃に、人の心を汲にけり。是申山祇
様、御二人が中に稻田姫とて獨娘の候が、尊様へお寐間の御伽に参らせて、御不便は
蒙れ共、我々が娘、尊の后と申さんも恐れ有。是を養子に参らすれば、山祇様は舅君、
是に増たるゆかりなし。御本意遂られて後、親しき御對面も有やうにと存るが、長者
殿如何思召「手」尤々親子の盃、善は急け」と立寄て、明る歩障のさやかなる。雲井の
人の盃に、蘇民も顔は色付て、「お目出度や」とぞ祝しける。大山祇大に悦び、稻田姫
を我子にして指上れば、勅説も背ず、尊にも背ず、此上の本望なし。御對面執成は、
夫婦の人に任せ置。暫く旅宿に逗留し、吉左右を待申」と、蘇民誘ひ立歸れば、稻田姫
は親子の禮義、長者夫婦も色代し、別れて旅宿に歸りける。時刻吹巻く夕嵐、音も崩
るる山宇津木、一枝虚空に鳴渡り、棟木にはつしと血煙立、柱を朱に染てけり。夫婦は
「あつ」と動顯し、「悲しやしらせの山宇津木が立たは」と、母も姫も絶へ入ば、長者も騷
ぎ、「うろたへなく、ヤレ男共女共、早ふあの木を取て捨、柱を拭へ。ヤレ梯子よ次足

色代―挨拶

よ。棒よ杵よ」とひしめきける。幣帛引さけ、村中舉つて數十人、どかくと入來り、耳コレ／＼毎年の人身御供。いづくに印立べき、と地下中手分し窺ふ處、此家に知らせの宇津木がお立なされた。いつもの如く、人身御供所へ同道し用意せん。サア稻田姫をお渡し」と、呼はる聲々。夫婦も姫も力落、「前にしらせの大熱は、尊のお影で助かれ共、どふで遁れぬ命よな。ア、所の衆頼ます。何卒助けて下され」と、抱付て泣居たる。耳ハテ悪い合點な長者殿。誰がむごい目が見たからふ。かういふ我々から、來年は誰が身の上下であらふやら。合點づくでは渡されまい。サア御座れ」と押分る。手摩乳押留め、「粗忽せられな。我子ならば、所の法を我一人破らふか。此子は別に親が有。たつた今大山祇といふ人に養子娘にやつた。おれが娘でないからは、人身御供に立てふ筈がない。爰に置ゆへ喧しい。養子親へ手渡ししよ。娘よ來い」と手を取て、駈出れば百姓共、「何處へ／＼。それでは其方の勝手が能かる。其様な事で濟なれば、大蛇に娘を取らるゝ者は獨も有まい。存の通、遅ふてさへ在所中へ祟が來る。長者殿でも手摩乳様でも、是ばかりは除けられぬ」と、あらけなく引立る。夫婦は悶へ繩付一過つた在所の衆、待て下され。人身御供に立ませう」と、漸に引留め、娘を中に取廻し、顔つく／＼と詞なく、喘

足摩—足無し
手摩—手無しに
かく

身に知る雨—身
につまされし涙

見通し—天下の
あらゆる事を見
ぬく

上く歎しが 足摩乳髪搔撫、「毎年人身御供の時分になれば、若や此方の娘にもあたらふかと幾瀬の思ひする内に、今年は餘所へと聞時は、ア、嬉しや遁れたよ。來年は何うあらふと案ずれば、今年も亦遁れた、嬉しや、と人の子の取らるよを悦んだ其報ひ、今年といふ今年、此方の身に報ひ來た。せめて病で死んだらば、骸成共残らふ物。顔見せてたも稻田姫。ナフ此美しい顔を、大蛇の餌食になすかひの」と、抱き寄せ咽び入、父立も立れぬわしや足摩乳」母「此方はもがれた本の手摩乳。如何しましよいの」と絶付、聲も惜まず泣居たる。姫も現の心なく、大蛇の餌食にならん事、悲しい上はなけれ共、所の作法は是非もなし、と諦めも有ぞかし。お年寄りられた父母に、長い歎をかけます。是が悲しいばかり」と、絶付ば抱寄せ、涙争ふ親子の様、在所の者も一同に、子を取られしは身に知る雨、我身にかよらぬ人迄も、袂を絞る計なり。素戔鳴の尊、白小袖御手に引提げ、とうくと動き出、是こそ丸が望時節。大蛇を討て本意を遂げ、國の歎を救ふべし」と宣へば、百姓共口々に、「大蛇を如何した物とか思ふ。頭が八つ角が十六、眼も十六見通しの變化。男にも女にも形は自由自在の物、殊に男たる者、刃物を持たる影を見せても命がない。手に覺え有ならば、亡して一在所の末代迄の

難義を救はれよ。必々、怪我をして我々恨給ふな。ア、いはれぬ腕立、命の懸替有そ
ふな」と、一度にどつとぞ笑ひける。素知らずや、我こそ天照神の弟素戔嗚の尊。大蛇
を討べき我手だて能く聞け。如何に自由を得たり共、龍蛇は必酒にまどふ。八つの甕に
毒酒を湛へ、稻田姫が影を移し、呑干す折を見合て、討になどか討ざらん。ヤア稻田姫、
此白き衣服の袂、外を圓く縫はせしは、刃の反を隠さん爲。大蛇が間近く來らん時、わ
き明の此所より、劔を出し腮を刺せ。我其時走付、大蛇にもせよ、毒蛇にもせよ、一ひ
しぎに取て伏せ、奪はれし寶劔、やはか取らで置べきか」と、はよぎりの名劔を渡し給
へは稻田姫、戴く劔をわき明の、袖に包んで衣更、太刀を一振かくせしより、わき明を
振袖とは、此時よりぞ始ける。手摩乳夫婦も、生死の頼は尊の詞の末。松にかよれる
命の露、數の土民に引立られ、浮をかり行く稻田姫。夫婦は涙に暮方の、時をつれなく
別れの道、見返れば引立る、駈出れば引留む、名残を末世にとどめくる。事も愚や、稻
田姫は祇園少將井、大山祇は三島の明神、開耶姫は富士權現、瓊々杵尊は外宮の相殿、
神と神との振合せ、袖の縁こそ久しけれ。

第五 八雲狸々

ウタイ既に時刻も夜半の雲、天を焦せる箭の煙、谷深ふして嶺聳へ、山水滾る皴の川上、
 八つの獲に毒酒を湛へ、影を浮べる高棚に、五重の荒蕪、注連を引、贅の少女を居置た
 り。文祭無慙成かな稲田姫、昨日迄も今朝迄も、お乳や乳母にかしづかれ、荒き風にも當
 ぬ身を、つれなく一人捨られて、説教父よと呼べば谷の聲、母よと呼べば松の風。かよる
 べしとは夢にさへ、いざ白小袖の振袖も、絞りがねたる哀さよ。時に山鳴り震動し、谷の
 水音さど波立、あれく遠に雲起り、俄に降來る雨の足、鳴神稻妻天地を返し、大蛇が
 姿現れたり。消ゆるとすれど吹上て、又山風が焚く箭、皴の川上に年を経て、住と濁
 るは濃き薄き、酒にもまるよ九十九髪。亂れ心は何ゆへぞ。我寶劔に心をかけ、岩長姫
 とは生れしが、蛇道の縁は切れやらす、悪女と生れ人に笑はれ憎まれし、美女は悪女の
 焔の種。よしとは云はじあし原や。八島の浦の外迄も、見め美き女を取盡さん、と皴の
 川上に隠れ住、八つ岐の大蛇と成て、人を取事多年なり。嬉しや今宵ぞ廻りくるく、姿
 は女、心はいかに、鬼共蛇共見へ分ず、見る目も暗き心の闇。消ゆるは露より心の玉、輝

皴の川上云々！
 雲は大蛇の遺懷
 九十九髪一百と
 世に一年足らぬ
 云々の歌より出
 でて白髪の手、
 髪は亂るの序に
 むけり
 焔一妖妬
 あし原一惡しに
 かく

くる／＼來る
に掛けて女は稻
田姫

亂れ心云々大
蛇の酔て現なき
誘言

やんようりうし
云々果實草花
香木等を歌にし
たるもの末はそ
の拍子なるべし
長春一齋薇

く大蛇が眼の光。蛇あれこそ今宵の我贅ぞ」と、しもとを振上紅花の舌を振立く、歩
むとすれ共、毒酒の薰に引留られ、立寄る一つの甕の影。爰に女はありくくくく有
明の、月夜にあらぬ桂女の、姿は一つ陰は二つ、三つ四つ五つ、七つ八岐の大蛇が魂
八つの甕に八つの形、いで飲干して、底成女を贅に取らん」と、飲でも亂るゝ酒のさど
波、寄り來るく寄せ來る面、面を浸し頭を下け、飲め共く盡せぬ泉。次第に傾く大
蛇の影、面色變じて茜さす、角は珊瑚の枝を振立、忿怒の醉に足引の、山もくるく、
野もくるく、踏留むればよろ／＼。立上ればたぢく／＼。かつばと伏せば、亂れ
心は只一身、返すくも恐ろしや。亂瀧の響きは鼓、松風笛の音、雫と積りて菊水消へな
がれ、竹の露の甘露、月は影有明、朝霧夕霧添へて汲むは玉水。面白の夜遊や。歌やあ
んようりうしく、なつてんりうたんきんくくは、咲いた。銀杏金柑楊梅寒梅、瓢箪
鳳仙花、やあん鐵線花く、梅檀沈丁花、芙蓉林檎、長春半夏草、ゑよすゑ、ゑよゑ
すりよゑよすゑすすりよこんりやう、ゑすよりよこんりよこんちんこんりやうこんちん
かう、ころくくくび、起てはまるび、己が心の戯れは、人の命の仇敵。馬捨たる身
さへ若しや又、遁るゝたけは」と見廻せば、爰の山陰、彼處の岨、八岐にまたがる大蛇

が姿、東南西北四面四のい、はたと雷電降く内、八つの形は顯然たり。蛇、誠の女はあれこそ」と、執念き顔吐く息は、巖を穿ち、古木を倒し、落来る木の葉ははら／＼はら。あら腹立やく。僞る人の心の酒、盛て悔ると甲斐有まじ。思ひ知らせん思ひ知れ」と、八つの姿は附纏はつて、くる／＼、手繰れば千尋の大蛇が形、眼は火輪、

火焔の背、鱗を鳴し、角を振立、雲を巻上げ巻下し、高棚目懸かよりしは、すさまじかりける三重、勢なり。姫は有にもあらばこそ。「死するに二つの道なし」と、只一筋に思ひ切、谷へかつばと飛下るれば、つれなき玉の自然、土手の平沙に下り立たり。「嬉しや生る道筋」と、目指も知らぬ草の原、亂れ／＼て辻まどふ。大蛇は怒の鱗を立、めう火の腮は利劔を吐き、山岳草木動揺し、河水をかへし、大地を蹴立、追立追詰、三重追廻り、

弱腰を引くはへ、只一呑の毒蛇の口、遁れがたなき世の鷲、哀れはかなき右様なり。せきにせいたる尊の顔色、眞黒に成て駈來り、「姫が敵、天下の仇、何時迄遁し置べきぞ。寶劔出せ」と、心體八膚に力を入、小脇にうんと抱締め、「るい／＼／＼」と引立れば、勇力和光の猛勢強く、弱る處をどうと投付け、頭にしつかと踏跨り、「劔を返せ姫返せ」と、角を擱んで捻付る。時に胴骨動き出、大蛇が背を腹の内より、さら／＼と切さばき、

玉の自然—玉の緒にかく玉の踏めう火—猛火か

二振袖―二より
を抜袖にかく

敷品―布くに
か
りて日本の事

稲田いなだ姫朱ひめあけに成なつて顯あられ出いで、「尾筒おづつに隱かくせし十握じゅうつかの寶劔ほうけん、やすく取とて候う」と、右みぎと左ひだりに寶劔ほうけん
 利劔りけん、二振袖ふしづきに引ひきさけて、につこと笑わらひし其顔そのかんはせ、尊そん御悅喜ごえき淺あからず、天あま叢雲むらぐも御劔ごけんと名な
 付つ、大日本だいじつほん寶揃たからそろふぞ目出度めいでけれ。尊そん大蛇おほへびが頭かぶより、寸々すんくに切伏きりふせ、天兒あまのこ
 屋やねを先まとして、大山祇おほやまづみ、蘇氏そぢ將來しょうらい、手摩乳てなつち夫婦ふうふ、日月にちげつの御篋ごけつ真先まゝに押立おしだて、御迎むかひひの諸軍しよぐん
 勢せい、野のに満山みちに敷島しきしまの、歌うたに和やはらぐ君きみが代しろは、八島やしまの外ほかの國くに迄までも、日本にっぽんの威ゐを振袖ふしづきの、人ひと
 民たみ無な病びやう延命えんめいに、五穀ごこくは家いへに滿みちにける。